



江戸名所圖會

五

JL 4
3605
5



河崎六郷渡口より向ふ方よりあり東海道官驛

初程品川より二里半驛舎数百軒敷く

小田原北条家の所領後帳に雉田新三郎及び伊勢兵庫頭同宮豊前守等此所領の中は此河崎の地名あり又同書大珠寺分十九貫四百文の内五百文を河崎に伏せしあり

平安記行

河崎より海を渡り使なるとありやとてあそむる

於朝あうけりて河崎の混とみるをみる

かゝるものゝこの里をすてこれに登りてみれば

河崎庄司次郎高重宅地 其舊地今志らくは相傳ひ高重昔淡谷に住せ後遺論のりありて此地へ移り住となり又旧地堀内小あつて山王の祠とも此河崎に遷せしなり

昭和十九年四月五日
三上庫士



河崎万年屋
奈良茶飯

刀年

五ノ冊ニノ七八

按今河崎の驛舎の南に堀の内と字あり山王権現の社あり
疑ふらざる高重渋谷より述べて河神なるをいふれども次の山王の社地
ありては其趣を違へり又此の堀の内と稱するも高重の日記の地なり
これと土人の言を詳せば他日考へべきなり

堀内山王権現宮 河崎上新宿街道の中程より左へ入る二丁中
南にあり相傳ひ 欽明天皇の御宇勸請せしなりと河崎の鎮守
中々神領あり 社司鈴木氏奉祀也 鈴木氏祖先を三郎高重と
いふなり

本社 祭神武甕槌命相殿 伊津主命 菊理媛 五神合祀也
伊津諾尊 伊津冊尊

正月三日流鏑馬神事あり六月十五日ハ大祭あり十三日あり
十六日に至る大祭賑へる其間渡田邑の海濱にあり所は旅
所へ神幸あり 堀内森と号く河の洗池あり其傍に舟の業祠あり又
土人云此の洗池にあり 十五日神輿渡河の時前へ神幣七柄を持
魚出ハまきり守眼あり

知せり相傳ひ弘安四年川畑櫻川左近助と申する人勅をきり
奉幣使として当社に向ひて一頃の幣串なりとて当社第一の
三ノ七十九

神寶とて 奉幣使の人名を不審しくも 又九月十九日あを角力の伎を
只傳説より月記をのこす

奥形十一月廿三日ハ八年の市立也

洲河原桃林河崎渡口より大師河原迄の間わく田園悉く
桃樹を栽り故に開花の時に至ると紅白色を交へて奇
観あり

除厄大師堂 大師河原にあり 金剛山平間寺金乗蜜院と号ひ
真言宗の醍醐三寶院に属す 當寺に安置せし大師の靈像を
大師河原と号ひ永祿二年平田原北条家の所領 此地より出現あり故にその地を
役帳に「行方と次郎」といふ人此地を領せしあり

弘法大師像 弘法大師の真作なり 海中より出現
ありて多佛體悉く貝売相著てあり

額 金剛山 石川亮頼直筆 容威は平間寺と書せしも
同人の書なり

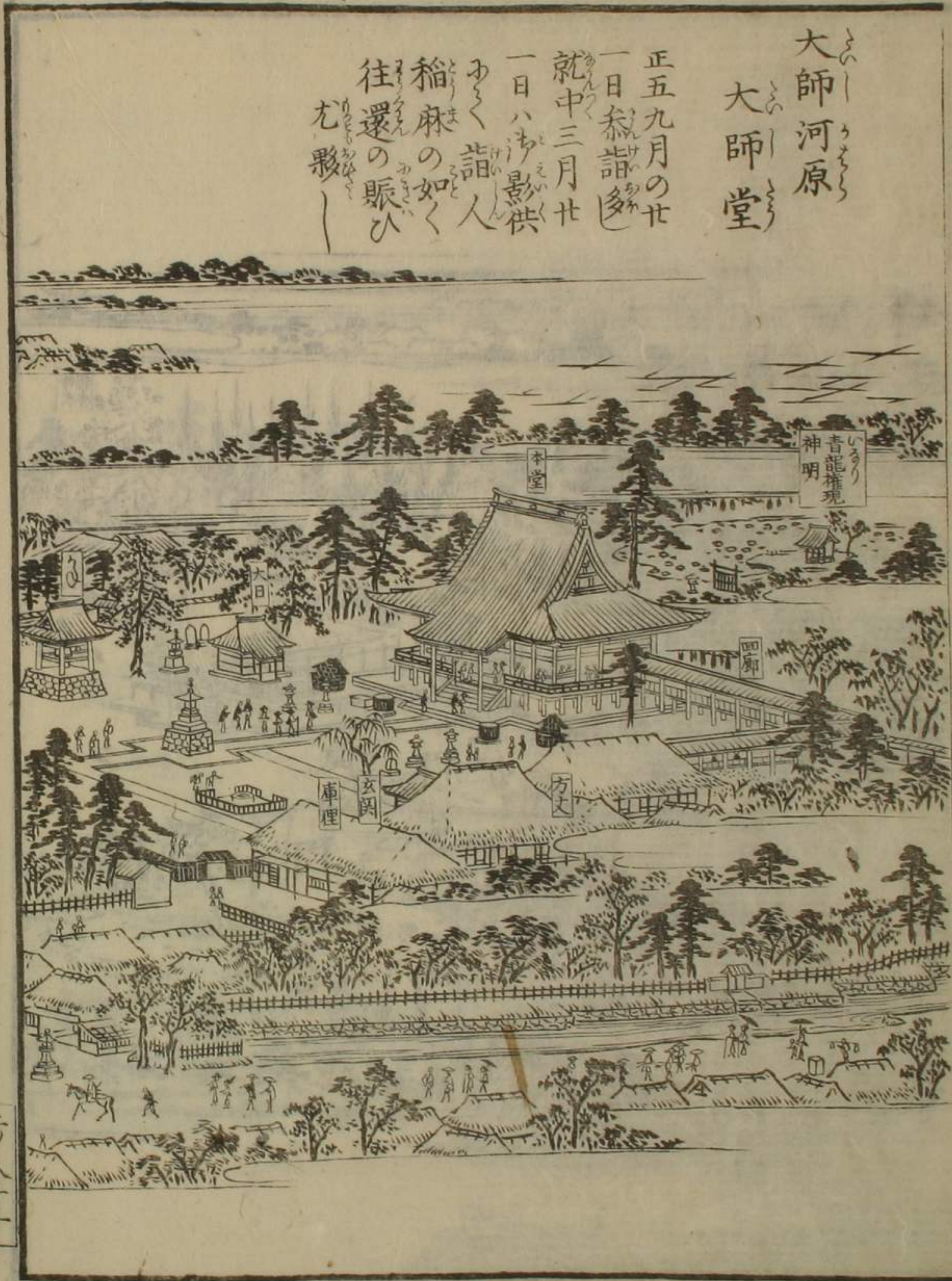
六字名號石碑 堂前左の方あり石面中は南無阿弥陀佛とあり
傍に寛永五年三月二十一日雪翁月盛居士と注し花押を
印せり碑陰は武州江戸京橋紀伊國屋櫻井又大夫三月二日御靈夢の所六郷
大橋中々大師の御筆を蒙り此名号法名雪翁月盛居士万人は愚筆を添く

按同所佐木明神の社記に佐木四郎高綱頼朝公の命を蒙り河崎
山王宮の社造営奉行なりと云ふを載り當社の名をのこるなり



河崎山王社





供養となき一鐫付り東海道名所記云く寛永年中江戸京橋に紀伊國屋作内
とて一文不通のものを酒を造りて業を内深く此本を信仰し常は安成
運ひたる小舟の夜に夢中大師六字の各号を書教へ奇異の地ひひとあり
當寺の大師へ系指しゆゆ六郷の橋の上より筆一對拾ひぬり夫より大師の教へ
あり各号を書しゆ筆勢は類なるこれハ作内石塔に各号を書き鐫つけ
大師河原に建たりされと外のよりハ一字をもち書始りきと云

縁起曰弘法大師の靈像ハ大治年間此所の浦に住る平間
氏某なる漁人常は三寶を敬み其家貧しく産業を弘ん
方便も終く空しく年月を送り迎へ既は四十二歳の年あり
依り災厄消除を神佛に祈るも或夜大師告く曰く我昔
在唐の日自ら吾の肖像を彫り有縁の地は漂着せしべ
誓ひ海水に投を後久しく海底にありし今幸ふ此浦に止る
汝網を下して是をば永く此地に化益を布厄難を除滅
し人々の所願圓滿ならしめんと漁人夢覺く奇異の事と
夜のありを待り海上を見渡す一條の光明赫たるあり

其所舟を寄せ網を沈降せし果て夢中に見る此容
貌小毫釐も違はざる大師の靈像を得り仍一字を創立し
平間寺と号平間氏の号を爾來已降靈應著く常小詣人
絶るなり正五九月の廿一日別く三月二十一日ハ御影供後仍
ある小大は賑はつと

蜂龍盃 大師河原村池上氏の家に蔵せり往古慶安年間此地に
於て酒戦あり一時用ひたり盃を酒七合餘りしと云
盃中蜂と龍と蟹との象を描金にせり 蜂ハさし龍ハのむ蟹ハ有と
相傳池上氏ハ小田原の北条家屬に仕ふ小田原落城の後池
上村に移り池上を氏とす 後今の地へ 此家ハ水鳥記に云えし酒客
大蛇丸底深々末裔なり 底深通稱を池上 慶安元年八月江戸大
塚の地黃坊樽次 茨木春朔と稱す春朔の弟ハ 此底深々家に至り
樽次底深共は酒將となり是數多の酒兵を集め敵身方と分れ

假いつはりの法令ほふしやうを立て犬居目礼古佛座等の名を設けて酒量しよりのりを様さんさまとく大盃おほたまひを執とく勝負しょうぶをころりころりとていいく戲あそびれとせせてそそのハ水鳥記みづとりのきの詳こまかなり

此書このしよは江戸えどと京都きよととの二本ありて何れも川がは本ほんの格次かくじを自みづから著かせし又また此家このいへの酒戦しよせんの時酒徒しよとは示しせる制さだめあり

今いまの川がは其半そのかたみを存ぞんせり格次かくじの書かきなりとく墨すみの跡あととなりて古色こしき疑うた之をたれとて支し水鳥記みづとりのきの所ところと必かならく異ちがなり序しよに連つる酒客しよかくの名左なひだりのあり

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 位 | 大 | 酒 | 官 | 地 | 黄 | 坊 | 樽 | 次 | 江 | 戸 | 大 | 塚 | 住 | | |
| 毛 | 藏 | 坊 | 鉢 | 吞 | | | | | | 同 | | 赤 | 坂 | 住 | | |
| 佐 | 藤 | 推 | 兵 | 衛 | 胸 | 赤 | | | | 同 | | 小 | 石 | 川 | 住 | |
| 鈴 | 本 | 半 | 兵 | 衛 | 飲 | 勝 | | | | 同 | | 船 | 町 | 住 | 住 | |
| 名 | 護 | 屋 | 半 | 之 | 丞 | 盛 | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | |
| 木 | 下 | 全 | 兵 | 衛 | 飯 | 嫌 | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | |
| 三 | 浦 | 新 | 之 | 丞 | 樽 | 明 | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | |
| 佐 | 々 | 木 | 五 | 郎 | 兵 | 衛 | 助 | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 々 | 彌 | 左 | 衛 | 夜 | 忠 | 吞 | | | 武 | 州 | 八 | 五 | 子 | 住 | |
| 松 | 井 | 金 | 兵 | 衛 | 門 | 久 | 酒 | | | 同 | | 南 | 河 | 原 | 住 | |
| 齊 | 藤 | 傳 | 左 | 衛 | 門 | 忠 | 吞 | | | 同 | | 大 | 師 | 河 | 原 | 住 |
| 喜 | 太 | 郎 | 醒 | 安 | | | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 半 | 斎 | 坊 | 數 | 吞 | | | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 小 | 倉 | 又 | 兵 | 衛 | 忠 | | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 佐 | 保 | 田 | 醉 | 久 | 忠 | | | | | 同 | | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |

甚た見み坊ぼう樽そん持ち以も上う十じゆ七しち人にん來きたり相あひま州しゆ平へい塚づか住ぢゆう同どう鎌かま倉くら住ぢゆう

末 <small>すえ</small>	廣 <small>ひろ</small>	松 <small>まつ</small>	稻 <small>いかり</small>	荷 <small>かり</small>	新 <small>あらた</small>	田 <small>た</small>	石 <small>いし</small>	渡 <small>わた</small>	氏 <small>うぢ</small>	の	門 <small>かど</small>	辺 <small>へ</small>	は	あ	も	此 <small>この</small>	石 <small>いし</small>	渡 <small>わた</small>	氏 <small>うぢ</small>	も	水 <small>みづ</small>	鳥 <small>とり</small>	記 <small>き</small>	小	昔 <small>むかし</small>	々 <small>々</small>			
朝 <small>あ</small>	中 <small>な</small>	倉 <small>くら</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	池 <small>いけ</small>	大 <small>おほ</small>	上 <small>う</small>	丸 <small>まる</small>	池 <small>いけ</small>	上 <small>う</small>	太 <small>おほ</small>	郎 <small>らう</small>	右 <small>みぎ</small>	衛 <small>ゑ</small>	門 <small>かど</small>	底 <small>そこ</small>	深 <small>ふか</small>	武 <small>ぶ</small>	州 <small>しゆ</small>	大 <small>おほ</small>	師 <small>し</small>	河 <small>か</small>	原 <small>はら</small>	住 <small>ぢゆう</small>
朝 <small>あ</small>	中 <small>な</small>	倉 <small>くら</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	池 <small>いけ</small>	大 <small>おほ</small>	上 <small>う</small>	丸 <small>まる</small>	池 <small>いけ</small>	上 <small>う</small>	太 <small>おほ</small>	郎 <small>らう</small>	右 <small>みぎ</small>	衛 <small>ゑ</small>	門 <small>かど</small>	底 <small>そこ</small>	深 <small>ふか</small>	武 <small>ぶ</small>	州 <small>しゆ</small>	大 <small>おほ</small>	師 <small>し</small>	河 <small>か</small>	原 <small>はら</small>	住 <small>ぢゆう</small>
朝 <small>あ</small>	中 <small>な</small>	倉 <small>くら</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	同 <small>どう</small>	池 <small>いけ</small>	大 <small>おほ</small>	上 <small>う</small>	丸 <small>まる</small>	池 <small>いけ</small>	上 <small>う</small>	太 <small>おほ</small>	郎 <small>らう</small>	右 <small>みぎ</small>	衛 <small>ゑ</small>	門 <small>かど</small>	底 <small>そこ</small>	深 <small>ふか</small>	武 <small>ぶ</small>	州 <small>しゆ</small>	大 <small>おほ</small>	師 <small>し</small>	河 <small>か</small>	原 <small>はら</small>	住 <small>ぢゆう</small>

未廣松



庭中林泉の儲杯あり橋の傍に下戸の葦渡屋ありと
 注せし制札を建たりと云なり酒客宴飲の旧跡を今田園を
 なる此松も底廣々愛樹やと云未廣とを名つけたりと云
 此家やと酒戦の頃用ひたりと云大盃ありと云
 箱の蓋に水鳥底廣盃と題し又左の如く此
 発句を注せしと云
 大所は多しありありと云
 路ありありと云

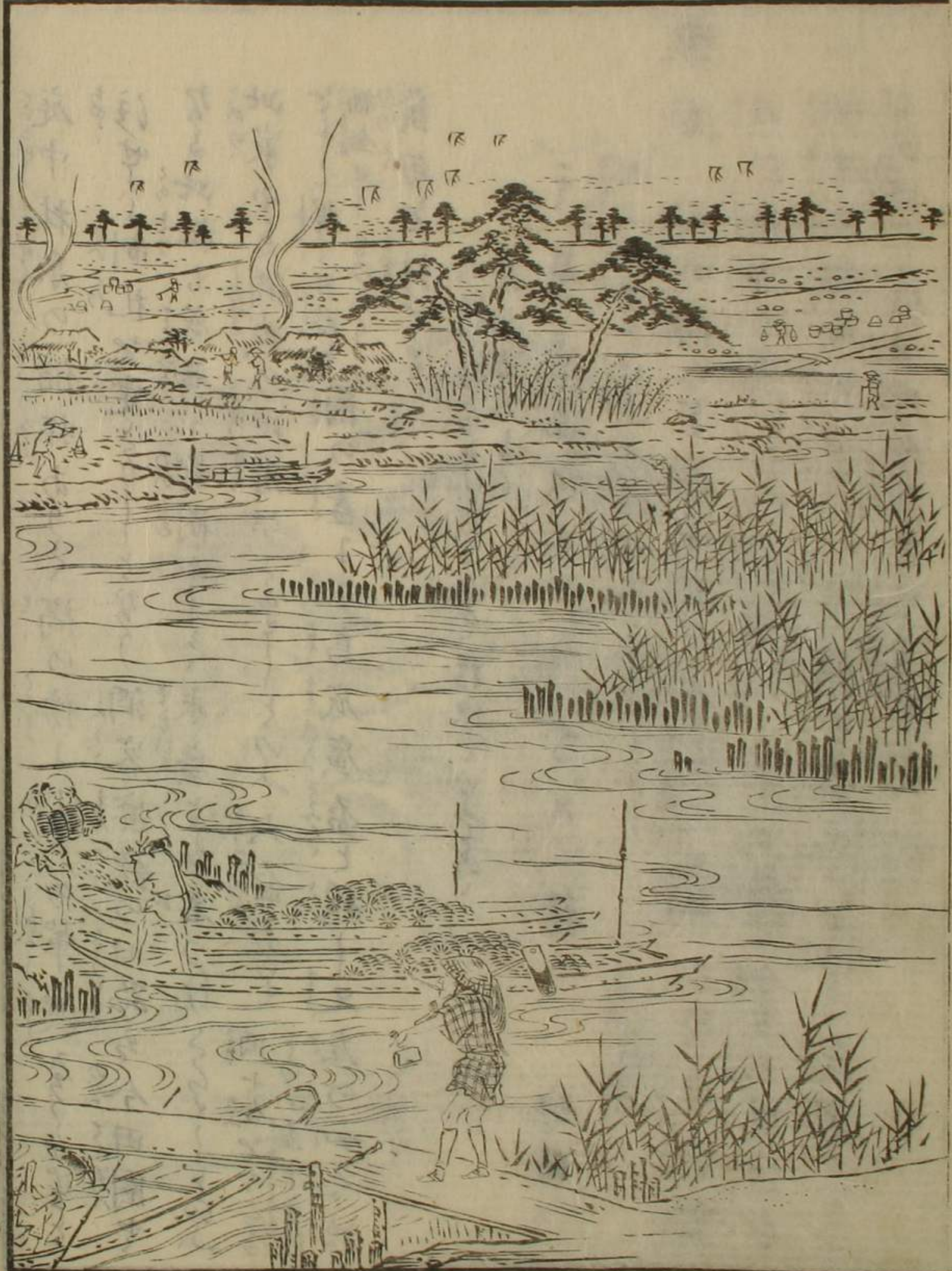
二所 蔓や西爪上戸能か乃程

活圖

鹽濱

同所南の方北海濱なり寛文九年己酉叶榮雲
 及い泉市右衛門と云者初と云依り今も大師河原
 川中島稻荷新田等村に鹽を製するを以て産業と云
 その少くは此地風光甚佳景なりと云

河崎
汐濱



石観音堂



石観音堂

同所平間寺より七丁斗里南あり天台宗に

慧日山明長寺と号し本堂ハ石像の如意輪観音之

故は石観音 毎月十七日道俗通夜系籠を靈龜石ハ門内左の

垣の傍にある所の石の手水鉢を以て 十八年の秋海底より出づ

不の靈石や此地の漁人引揚むとせし時二三の靈龜が漁人と共に

捧げ揚ぐ依り大悲の威神かありとあり同七月晦日竟堂前居り

損し水とこりこり

新田大明神社 堀の内山王の社より耕田を隔て七丁斗南の方

渡田村の道より右におあり 渡田昔ハ 例祭ハ七月二日なり土俗

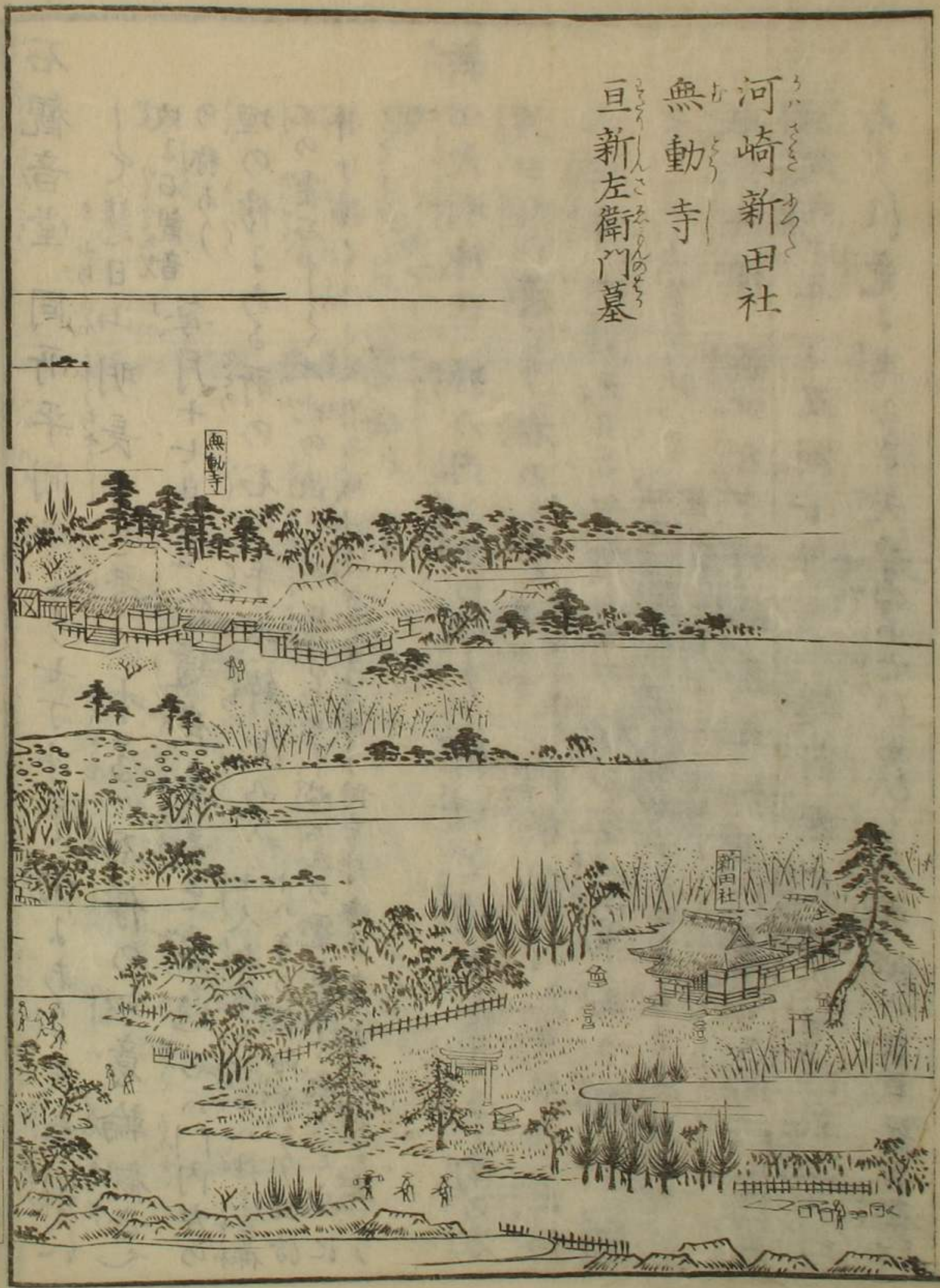
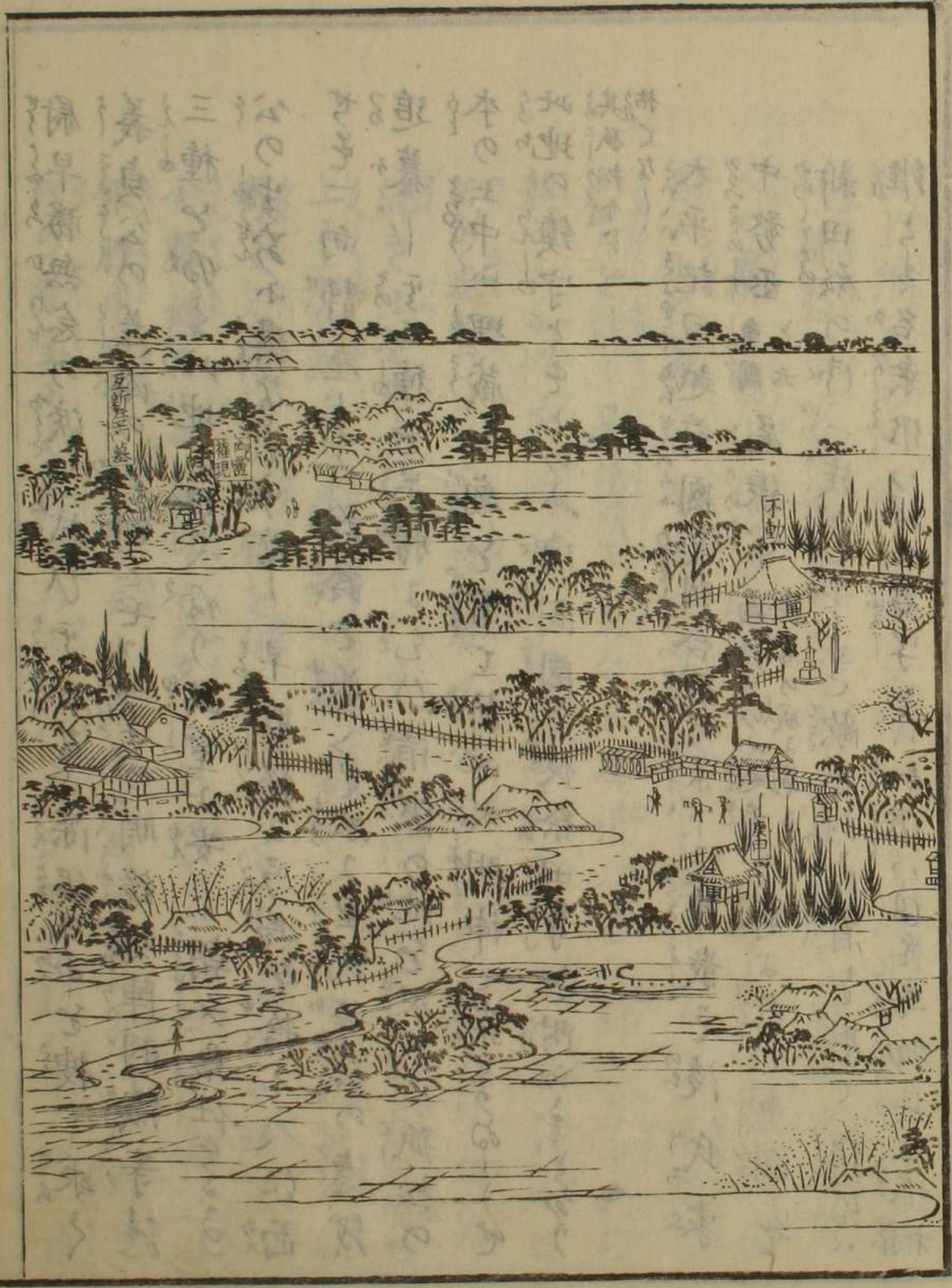
云毎年西月元日と七月二日の 曉中必軍馬の 駒く音

せりみあそとつと 相傳河北村小鎮座ましゆを慶子義興公の神

本社祭神 新田左中将源義貞朝臣の靈なり相傳義貞

公延元二年丁丑閏七月二日越前國足羽の里に戦ひ利

あつて 竟主あき矢のあせひあひく骨鯉の臣巨新左衛門



河崎新田社
 無動寺
 巨新左衛門墓

尉早勝無念の涙を拭ひて不なる深泥の中を捜し求く
義貞公の差添の名剣と七ッ入子の明鏡及陣羽織等純
三種とゆく此地は携へゆり幽室は安し朝夕給仕せり
公の生家不異なりなす早勝終は弓馬を捨人面に
せむ一向静座し餘齡を養ふ然る里民等公の徳茂
追慕し三種を早勝乞ひ清潔の地を求め孤松の
本の土中埋蔵し廟を営て新田大明神と崇まぬせ
此地の鎮守とせり河内國の後祭田等を附らるあり
其孤松今ハ
枯てなり

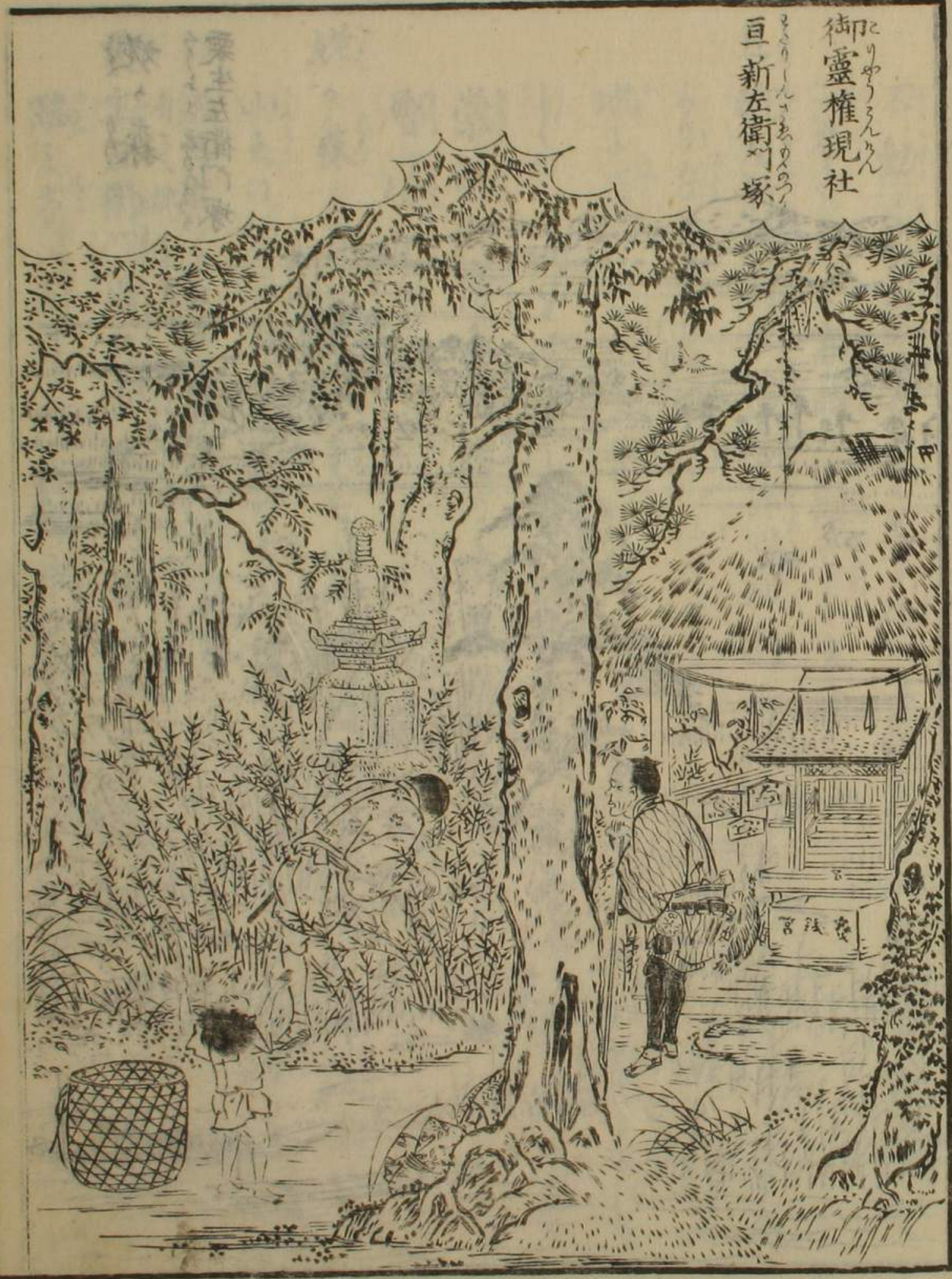
太平記曰越前國足羽合戦の条下軍散る後氏家
中務丞重國尾張守高垣越前の前は參て重國
新田殿の一族と云き敵を討く首を取て作らば
誰とも名乗作らば名字をい知作らば馬物具の様相

順兵ともの尸骸を見り腹をきり討死を仕作らば
何様尋常の葉武者あつてあつてと覺く是れ其死
人の膚は懸る作らば護り他と血を未あつたぬ
首は土の著る金禰の守を副て出たり尾張守
此首を能く見給ひある不思後や世は新田左中將の
顔つゝふ似たる所あるや若しれあつた左の眉は上に
矢の疵有つて自鬢櫛を以て髪を搔あけ血は
洗き土をあらひ落し是を見給ふ果は左の眉の
上は疵の跡あり是は弥心付て帯たる二振の太刀をハ取
寄るん給ふ金銀を延て作らば一振は銀を以
金膝纏の上は鬼切と云文字を沈て一振は金を以
銀脛巾の上は鬼丸と云文字を入る是ハ共は源氏重
代の重宝あり義貞の方は傳へると聞ゆれハ未くの一族

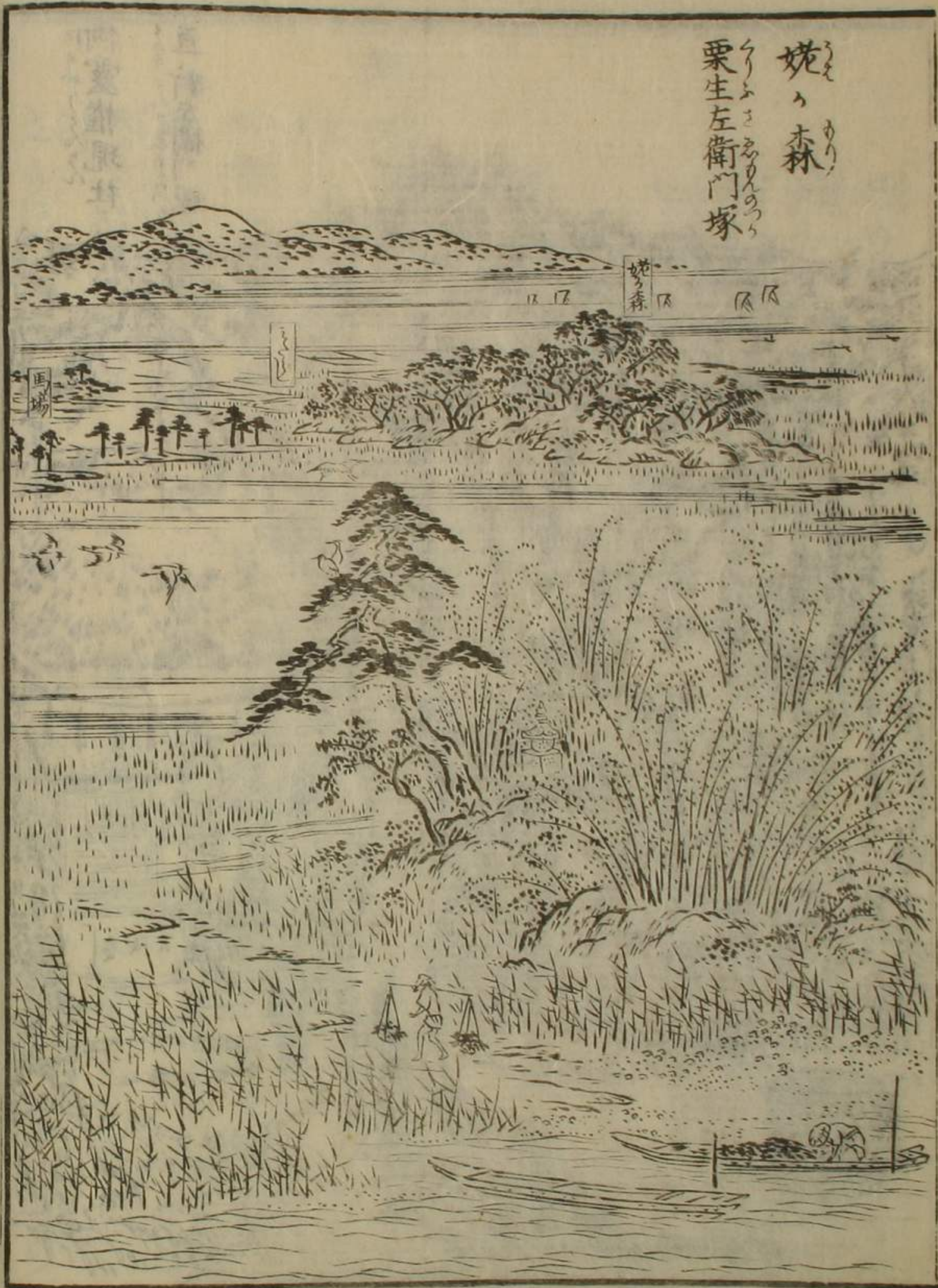
共の帯へ〜太刀や非を〜
 弥怪々れハ層の守を
 開〜〜
 吉野の帝は御宸筆あり朝敵征伐之
 事奮慮所向偏在義貞武功選未求他可運早速之計
 略者也と遊〜と扱ハ義貞の首は相違な〜
 と〜尸骸を興〜衆せ時衆八人昇せ〜葬礼のあり
 往生院へ送〜れ首をハ朱の唐櫃に入氏家中務を副〜
 潜〜京都へ上せ〜れ〜云云

新田山成就院 聖無動寺と号同所一丁斗南の方向
 側〜ある新田大明神の別當寺〜新義の真言宗
 六郷の宝幢院は属せり本寺不動明王ハ弘法大師の作
 也〜義貞公護持の靈像なりとのみ
 今別堂を建〜威怒堂と
 左の方 相傳義貞公入間川は陣を布り頃二童子の枕上り
 あり
 立ちハ瀧倉退治の心願ありハ巨田の里に安置し〜る所の

御靈権現社
 巨新左衛門塚



姥ヶ森
栗生左衛門塚



不動尊と崇信せむとなり依る義貞公此靈像は誓願を

こせと竟は高時を討ちしゆふと

巨新左衛門尉早勝居住旧址同所門前半町あまり西の方道

あり左よあり此地は元弘の頃巨新左衛門の采邑あり則此

地は住しりとのふ早勝没するの後も里民其旧恩を忘れぬ

しと一祠と營建し早勝の霊を鎮く御霊権現と

崇敬を傍る早勝の墳墓あり高と三尺計此石乃

層塔なり

姥ヶ森 成就院あり七八町計南の方海濱あり堀の内

山玉の旅所あり西の方へ續き馬場の形を存す土人義貞寄附の

馬場ありと云ゆ洗池ハ森の中

栗生左衛門尉忠良塚 同姥ヶ森あり八五丁計西の方海濱に

臨む方八間斗竹藪の中は有り五輪の石塔あり相傳ふ

有る終は其の形を存す

文宇剥落せり

忠良卒するののち後早勝のち朋友の信を以て其その靈骨を此地このちに埋う藏ざうし塚を築つくりしなり

瑞ま龍りゆう山さん宗そう參さん寺じ 河崎がさき驛えき砂子町さごまちの右側みぎがはの向むかひあり洞家どうけの禪ぜん

刹せきつ中ちゆう未ま占せんの宝泉寺ほうせんじは属まかを本ほんを釋迦しやくぢあ如来にがひらハ座像ざざうありて

一尺五寸いちせきごすん計けいの唐佛たうぶつなり取士とくしハ文珠ぶんじゆ普賢ふけんの本像ほんざうににく

作者さくしや詳ありては當寺たうじ古こハ藥師やくしの別當べつたう寺じなり相傳あひつたハ當寺たうじを

佐々木ささき四郎しちらう高綱たかながの香花院かうけえんなりては石頃いしがらハ砂子さご一邑いちやく悉しつく當寺たうじを

食地しやくぢなりては潤山じゆんざんハ臨室りんしつ玄統げんたう和尚おしょうと号なづ昔むかしハ濟家せいかの

禪林ぜんりんなりは鎌倉かまくらの建長寺けんぢやうじハ属まかせしとはののち遙とほの後のち天てん云いふ至いたり

小田原おだわら北条家きたうぢやの功臣とくじん間宮まみや豊前守ぶんぜんしゆう信盛しんせいといふハは永祿えいりく二年に小田

原はら領りやう役帳やくぢやうハ間宮まみや豊前守ぶんぜんしゆう所領しやうりやう武藏ぶさう久良岐くらぎ郡ぐん杉田すぎのた江戸えど川崎かわさき小机こがね未ま吉東きちとう

郡ぐん小こ准じゆん入い西せい郡ぐん富屋とみや三浦みやう元もと文ぶん珠じゆ坊ぼう知行ちかうぢやうの地ぢ名なといふ六百九十八ろくにやう貫くわん百ひやく廿に文ぶんの

地ぢを領りやうする佐々木ささき四郎しちらう高綱たかながハ遠裔えんえいなりはハ寺境じけい方かた八丁はちぢやうと寄よ

附つハ未ま吉邑きち宝泉寺ほうせんじ四代しだいの住持ぢゆうぢ自山じせん長老ちやうらうを請まねて當寺たうじの中ちゆう

奥おく潤山じゆんざんと曹洞宗そうとうしゆうニ改かへむ信盛しんせい法名ほふなを瑞榮院ずいえいえん殿てん雲谷うんこ

宗そう三大居士さんさいだいこしと号なづを其石塔いしかたハ當寺たうじ佛殿ぶつでんの後のちの方かた銀杏樹いんげんじゆの

下したに存ぞん在ざい元祿げんりく年間ねんかん觀くわん音いん幕まくら下間宮家しもまみやけより宗參そうさん大居士だいにこし供養くうやうの爲ため其米邑こめ

按あハ當寺たうじ什物じつぶつ元祿げんりく四年ねん辛未しんみ正月しげつ間宮家まみやけ寺領じりやう寄附きふち状じやうハ間宮まみや豊前守ぶんぜんしゆう

信盛しんせい法名ほふな宗三そうさんといふとあり又當寺たうじ潤基じゆんきの墓む碑いハ雲谷うんこ宗參居士そうさんこし佐々木ささき

前まへ豊前守ぶんぜんしゆう入道にうだう源康信げんかうしんと鑄こつてありて信盛しんせいの法名ほふなと宗三そうさんハ作しやくり康信かうしんの

法名ほふなと宗參そうさんハ作しやくる猶なほ疑ぎハ然しかれども寺号じごうと宗參そうさん寺じと稱なづハ又康信かうしんハ當たう

寺じの潤基じゆんきといふ時ときハ康信かうしんの法名ほふなハ宗參そうさんなりは疑ぎ無なきハいふはなり

高綱たかなが獲持くわくぢの本ほんをハ如意輪いぎりん觀音くわんおんの本佛ほんぶつなりは座像ざざう一尺五寸いちせきごすん

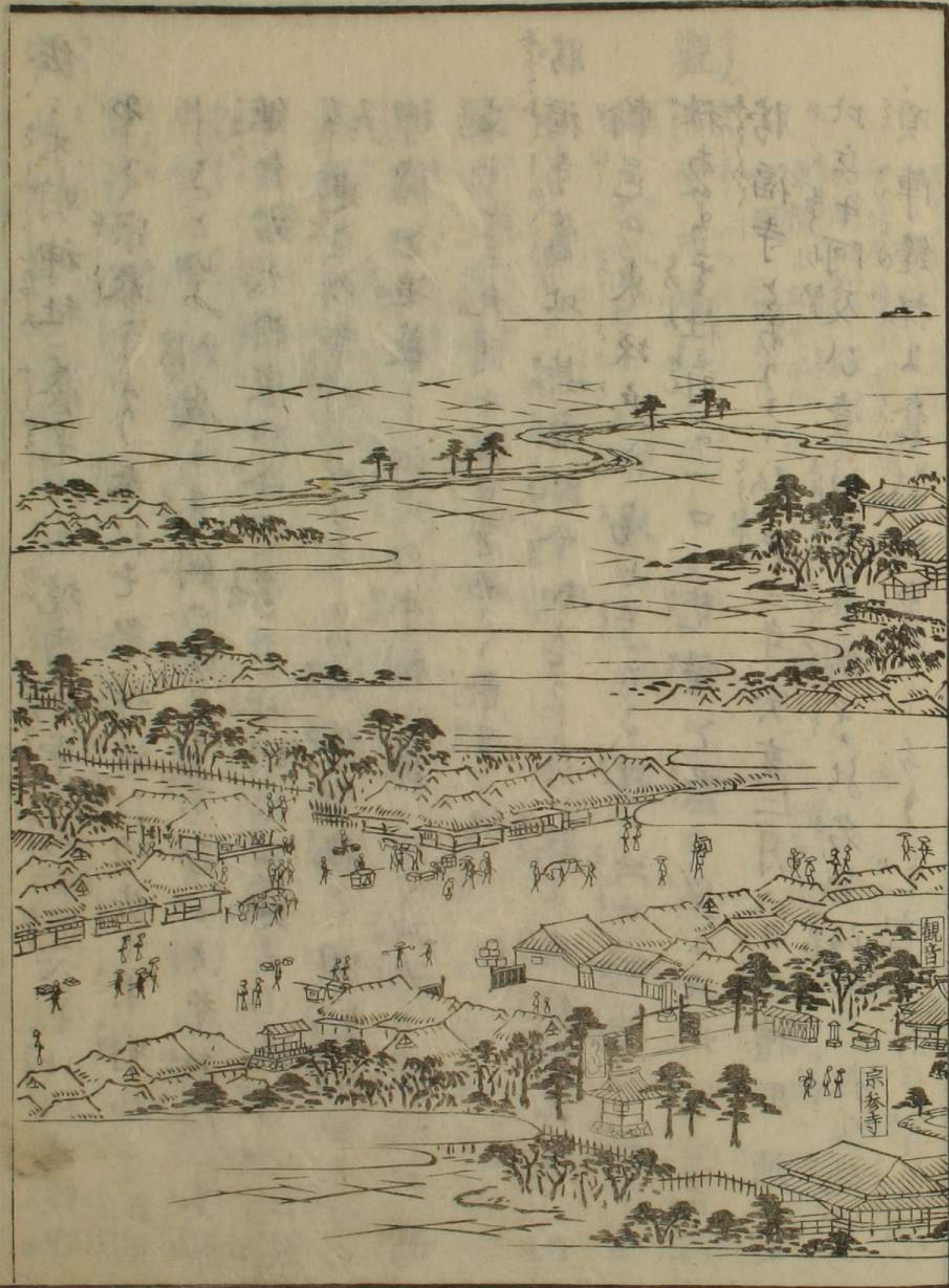
ありて作者さくしや詳ありて別堂べつだうハ安やすしはハ本堂ほんだうの左ひだりあり

海うみ栄山えいざん養光寺やうかうじ 宗參そうさん寺じハ四丁斗しぢやうと先まへの方かた砂子町さごまちの道ぢより左側ひだりがは

あり本ほんを藥師やくしめ來きたの座像ざざう二尺五寸にせきごすん計けいあり延曆えんりやく六年ねん丁卯ていぼうの

といふ此地このちの海中うみちゆうより出現しゆげんしはなりといふは海うみ中ちゆうより出現しゆげんの地ぢ名な發はつせりはと此靈像このれいざう

昔むかしハ宗參そうさん寺じの本ほんをいふはなりはと後當ごたうハいふは迷まよへりといふはなり



河崎
宗三寺
養光寺
佐々木宮

養光寺
本堂

佐々木宮

観音

宗参寺

佐々木宮

本堂

佐々木明神社 養光寺の境内本堂の右に並へり此地の鎮守
なり宗参寺より奉祀を祭神近江の佐々木明神は相
同しとて相殿は高綱の靈を崇むるとぞお傳ひ高綱
鎌倉右大将家の命を蒙り此河崎の地は山王宮堀内
に建立の事あり一ハ其縁を採り間宮信盛先靈の
神徳を追慕し江州の本祠を摸し此地は當社を創
立せし九月十九日を以て祭日とす

勝福寺舊址 其廢跡今知るる然る南徳望陀郡奈良
輪邑の東坂戸市場と号する地は坂戸明神と稱する
社あり其社前は一口の梵鐘を懸る銘は武州河崎庄内
勝福寺とあり弘長三年癸亥二月八日大檀那禪定
比丘十阿及ひ壹岐守泰綱等其名を注せり按るる
頃陣鐘杯は棄ひ取られしより其地はあるある

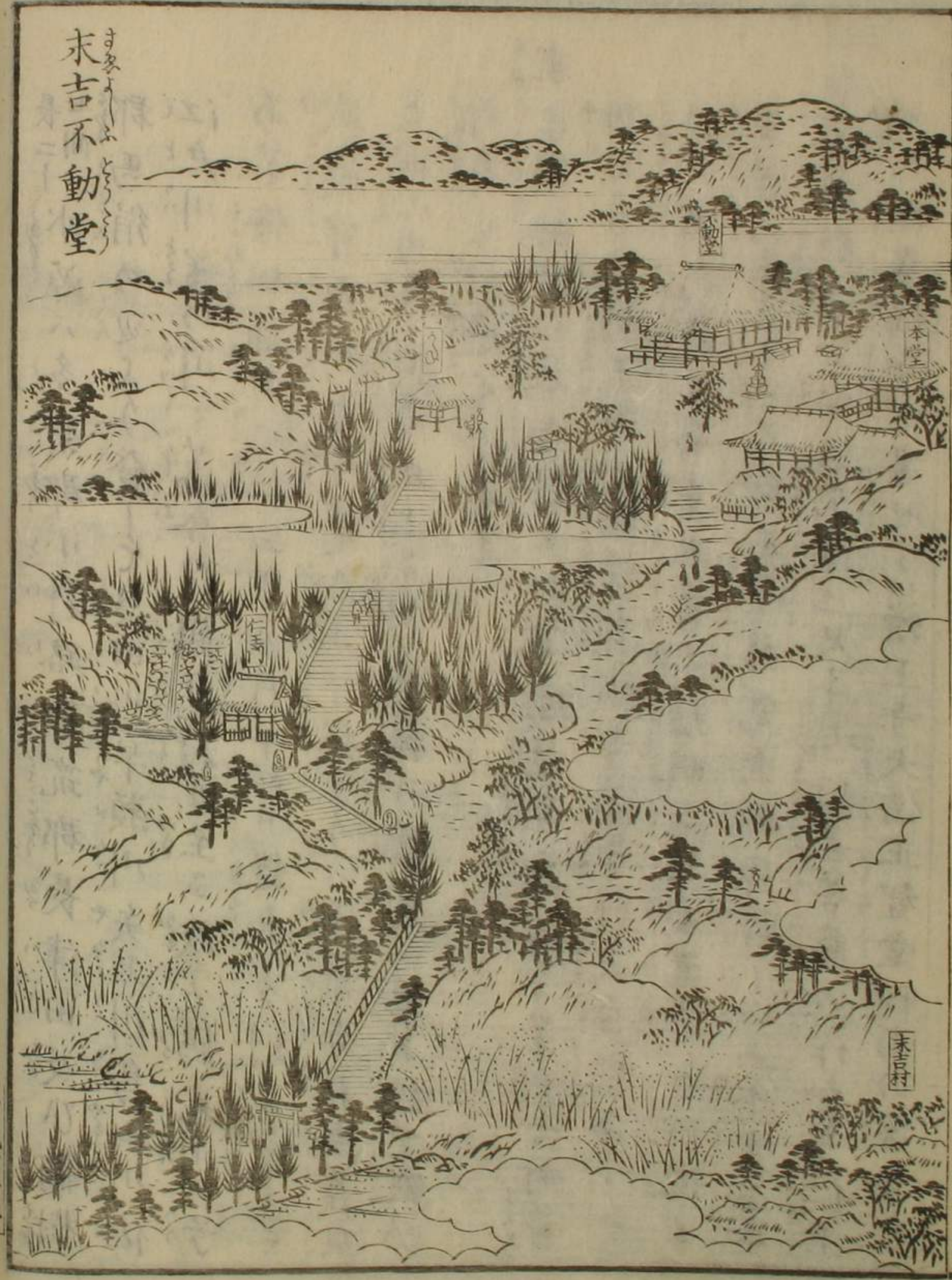
按る東鑑は文應二年辛酉此年二月改元あり弘長と号は五月十三日
甲戌今日書番の御廣御所はあはれと依り本堂前司泰綱と洪谷
太郎右衛門尉武重と口論は及ぶと云々然る時鐘の縁に泰綱とある
東鑑は記をのむ壹岐前司のうらなう一此泰綱ハ四郎高綱の甥なり
信綱ハ二男なり

觀音堂 市場村街道より左の方一心山專念寺なり淨
刹は安置せり本堂千手大悲の像を寛朝の作御丈四寸
あり紫式部の念持佛なりと云傳ひ兼應年間近江
國石山觀音の辺は老嫗一人住り或時西國杉脚の僧
愚藏坊照西といひ沙門此老嫗を宿せし夜老嫗の
病悩を救ふを報とて此靈像を授く後故あり當
寺は安置なりなるといへり毎月十七日ゆを集詣の人多
本堂に掲る額は一心山と書せし縁山前大僧正
雲外の筆なり
鶴見川 海道は架す所の橋の号も又鶴見橋と号す

市場観音



長二十
 七間 水源ハ多磨郡小野路都筑郡長津田及ひ橋樹
 郡馬絹の辺より發して恩田川早瀬川矢上川鳥山川佐
 江戸川等の川々落合ひ鶴見村に至る故に鶴見川の号
 あり梅松論小元弘三年五月十四日鎌倉方討ふと
 武蔵守貞将大御前向ふ下総より八千葉介貞胤義貞
 と同心の義有る攻上る間武蔵の鶴見の辺に於て戦ひ
 打負て引退くとあり
 末吉不動堂 末吉村あり鶴見邑海道より北七町半
 西あり明王山不動院真福寺と号ひ天台宗ありて
 品川常行寺は屬を本尊不動明王を安置をその像を
 坐像あり六尺餘あり慈覚大師の作といふ本堂あり
 十一面観音を安んず坐像二尺半り行基菩薩の作あり仁王
 門の額真福寺と書せし増上寺大僧正智堂和尚の書あり



末吉不動堂

秋田城介義景旧館地 其地今ある處は東鑑に仁治

二年十一月四日 將軍家武藏野開發の湯方違とあり

義景は武藏國の鶴見の別荘に渡御頗りて壯觀なりとあり

醫王山成願寺 鶴見村の内ありて街道より山手へ入るる三丁

斗より河り曹洞の禪刹にして寺尾天光寺は属し本号釋迦

如来ありて作者詳しは開山と聲菴聞大和尚あり号を

薬師堂小安あり所の薬師座像あり七尺斗り古佛と

してとも小作者知しはとふ

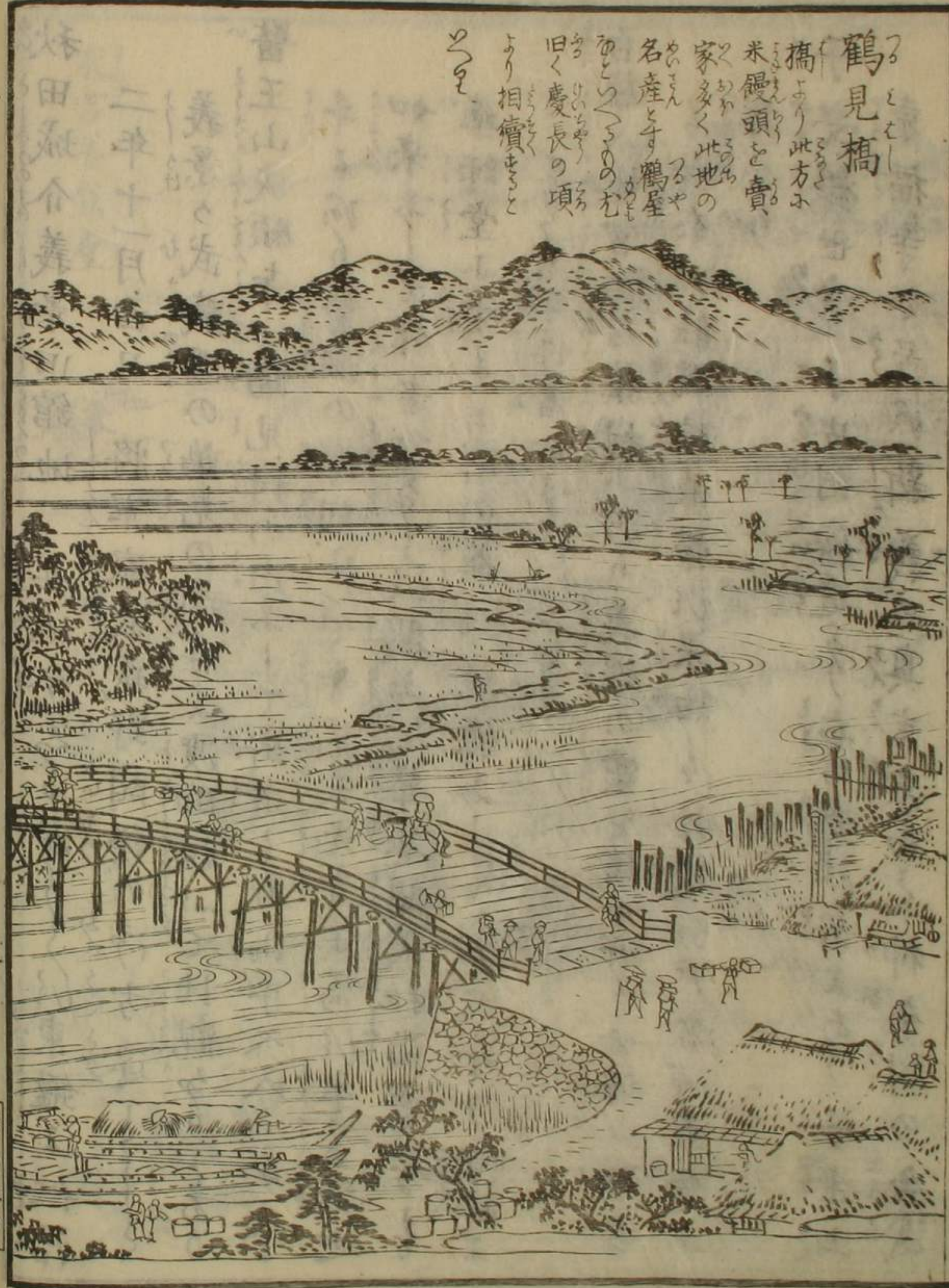
白旗八幡宮 白旗村あり義經の靈を鎮る所と云傳ふ別當

と神奈川能満院兼帯は来由と拾遺江戸名所圖會小

詳あり

子安觀世音 子安村海道より右の方北岳あり子生山

東福寺と号し新義の真言宗あり神奈川の金藏



鶴見橋
 橋より此方へ
 米饅頭を賣
 家多く此地の
 名産とす鶴屋
 名とつるものむ
 旧く慶長の頃
 より相續きと
 といふ

昔江山天淵
 美濃と九
 二平十一月
 田代介義



生麥村
 あかき茶店
 生麥の河崎と
 神奈川の宿を
 立場なり此地
 水茶屋
 享保年間
 開きあり梅干を
 齋き梅漬の生
 姜と商人往来の
 今時の繁昌



成願寺
七
一

白旗八幡宮



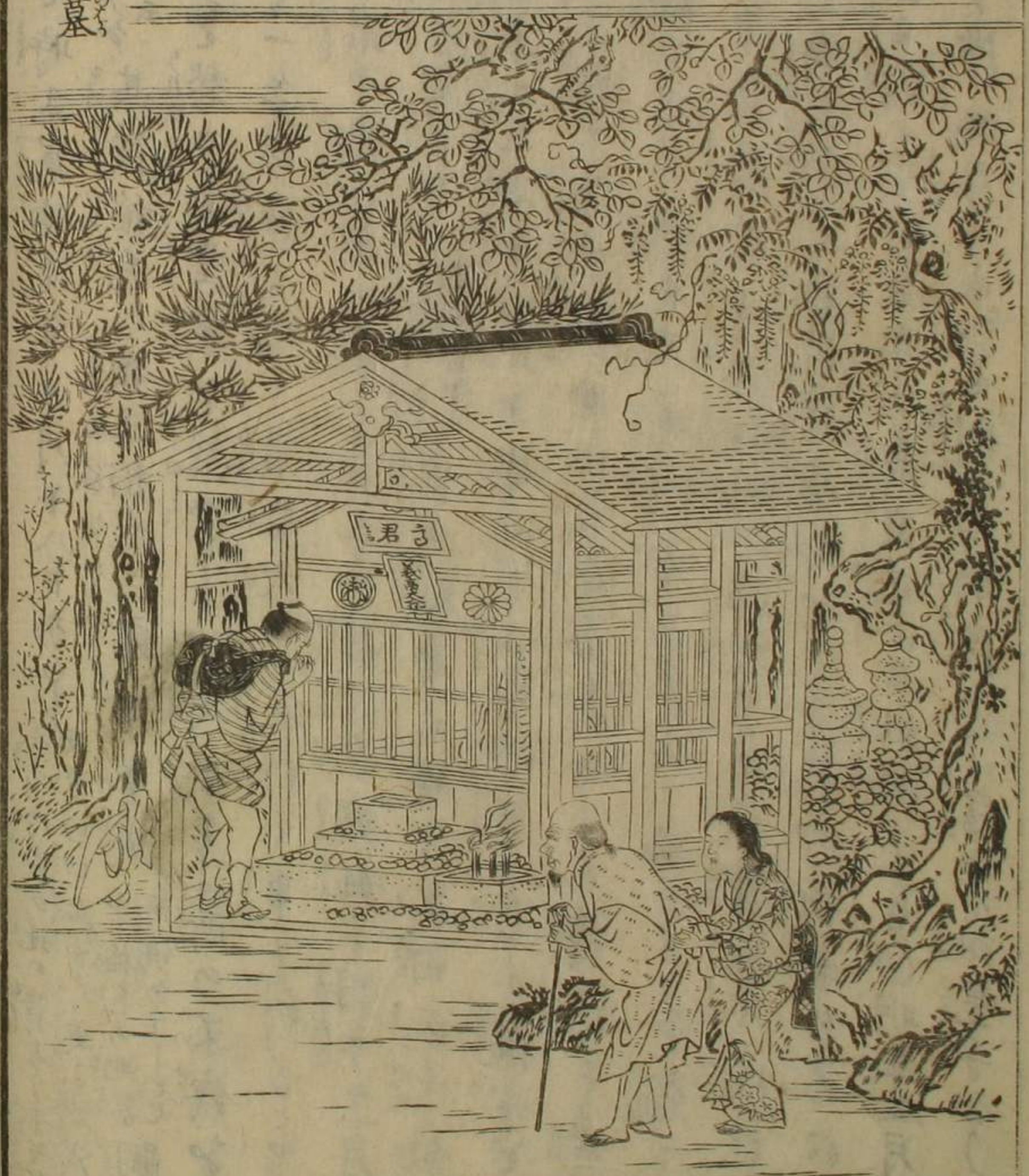


子生山
観音堂

院いんは属ぞくを開ひら基もとの大祖おほいそハ勝覚僧正しょうかくそうじの理源大師りげんだいにし本尊ほんぞんハ如意輪いずみりん觀音くわんおんゆゑ佛工ぶつこう春日かすかひの作つく一寸八分の座像ざざうなり
縁起えんぎ曰いは往古むかし勝覚僧正しょうかくそうじ一夜いちや異僧いそうを夢ゆめみるあり然しかに
件けんの異僧いそう告つて曰いは我われハ如意輪觀音いずみりんくわんおんなり昔佛工むかしぶつこう春日かすかひ
和州わしゅう泊瀨はくせいの觀音くわんおんを彫刻てうこくせし序ついで我われ形像けいざうを刻こし未
世よの衆しゆを利益りやくせよとたのむ然しかに我われ海中ちゆうちゆうにある久ひさし
今武州いまぶしゅう鶴見川つるみがはの末生麥まゝの浦うらハ漂泊ひやくはくを是これ我有われ縁えんの地
なり汝なんぢ開東ひらくに至いたる一字いちじを創立せうたつし安置あんじせよと告つぐべし
えんえん夢ゆめさむ僧正そうじハ奇異きいの思おもひをか直なし旅装りよづまひし
此生このあま麥むぎの浦うらに至いたるに光明くわうめい赫くわく爍くわくとて本ほんを海中ちゆうちゆうに
浪なみ小こ随ずつ勝覚僧正しょうかくそうじの掌上てのうら上うへに出現しゆげんし時ときハ又また薩埵さつたい告
て曰いは此地このち乾隅けんぐの山やまハ安あんまへし即勝覚僧正すなはちしょうかくそうじ當山たうざんハ登のぼり
佛意ぶつゐハ任まかせ地ちを卜うらひし草舎くさやを徑營けいゑいし今いまのあんを安置あんじ

せし時ときハ寛治元年かんぢげんねん三月十八日さんがつじゅうはちにちあり
改かへり其その後のち縮毛しゆくまの領主りやうしゆ縮毛しゆくま三郎平重成さんじやうへいぢゆうせい
いと云いふ愁うれと堂宇だううを修營しゆゑいし諸人しよじん供くむ所ところの米錢まいせんを
乞こふ一年いちねんの俸ちゆうハ比ひし晨昏あけくれ大士だいしへ礼拜らいはいし事ことハ
恰あやうも君きみハ給仕じゆしするも三年さんねんの後のち其妻そのつま懷妊わいじんし明年みんねん十月
一男子いちなんしを生うむ左衛門平重成さゑもんへいぢゆうせい歡喜くわんぎハ堪たむ美田みでん三千畝さんせんあ
山林さんりん方一里はういちり有半りゆうはんの地ちを寄附よせつし山やまを子安こやすと号なづし院宇いんうを
植本ちくほんと稱なづむ爾來なんぢより薩埵さつたいの威力ゐりき益新やくしんし禱賽たうさいする者
絡繹らくりやくとて絶たむ又堀川ほりがは帝皇子ていこうしハ悔くむ愁うれへ
あひしハ勝榮僧正しょうゑいそうじ勝覚しょうかくの此このがさの威靈ゐりんを奏聞そうもんし
依より前大納言まへだいなごん藤原道房ふじはらみちふさ卿きやうを其その祈願いのねの爲ために
當山たうざんハ詣まがてし三年さんねんの後のち皇妃かうひハ妊じんし明あ年ねん五月
太子降誕たいしかうたんなり是こゝ則すなはち鳥羽院とりはにんとすハ此皇子このこうしあり

義高入道墓



按鳥羽院ハ康和五年正月十六日
降誕シ多ク五月八日誤アリ
帝歳感斜カクハ勅シ七子生山
東福寺の号を賜ハ遙の後文龜永正の間東國屢兵戦起リ

頂大ニ衰廢セリトモ大悲閣の々々を嚴然トシテあり
寺僧云今至リ寄願ある者當寺中ニ宿シ諸人供養所の賽銭と乞年
限を定め納金ニ給仕と稱シ誠信ニ祈念シ諸人供養を給仕の年限満トモテ

仙鶴山松隱寺 東寺尾村ニあり
享保の頃ニハ 濟家の禪林ニ

鎌倉建長寺雲外庵の佛壽禪師開創の古刹あり
禪師ハ建武二年二月十八日化寂モとの鎌倉志ヲ文和
三年二月十八日ハ寂トあり此地ハ雲外庵の來地なり
本号釋迦如來ハ

慈眼堂 松隱寺よりさし渡シ寺子門を以テ小坂を
下リ廻リテ二丁半汁岡の上ニあり
佛工春日の作ナリ小机札所の一也
兼帶セリ

観福壽寺
浦島寺



開此宮若不開者自再相逢浦島子到本鄉林園
零落親舊悉亡逢人問之曰耶那島中人去帷而
去漸過百年髮帳子然如失步於耶那島中不夫去
死匣見之於是浦島子忽變衰老皓白之心人夫去

萬葉集

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣船之得乎
良布見者古之事曾所念水江之浦島兒之堅魚
釣鯛釣矜及七日家爾毛不來而海界乎過而擄
行爾海若神之女爾避爾伊許藝趨相訛良比言
成之賀婆加吉結常代爾至海若神之宮乃內隔
之細有殿爾攜二人入居而老目不為死不為而
永世爾有家留物乎世間之愚人吾妹兒爾告
而語久須史者家歸而父母爾事毛告良比如明
日吾者來南登言家禮婆妹之答久常世邊爾復

變來而如今將相跡奈良婆此匿問勿勤常曾已
良久爾堅目師事乎墨吉爾還來而家見跡家毛
見金手里見跡里毛見金手惟常所許爾念久從
家出而三歲之間爾墻毛無家滅目八跡此苦乎
開而見手齒如來本家者將有登玉篋小披爾白
雲之自箱出而常世邊棚引去者立走叫袖振反
側足受利四管頓情潰失奴若有之皮毛皺奴黑
有之髮毛白班奴由奈由奈波氣左倍絕而後遂
壽死祁流水江之浦島子之家地見
常世邊可住物乎劔刀己之心柄於曾也是君

按日本紀丹波國とて丹後國とて丹波國五郡を割くも丹後國を
紀元天皇の和銅六年夏四月乙未丹波國五郡を割くも丹後國を
置とあり夫後社郡丹後屬せし其地の書皆こも丹後國を
丹後風土記和名抄扶桑略記の類ひ與謝作又管川八丹後風土記
筒川は作る水江八日本紀水江とて萬葉集や或ハ墨吉とも新り浦島子



傳續浦島子傳とに證江とを按小仙覺律師の萬葉集抄より所の丹後風
土記に美頭乃磨能宇良志麻之古とありくもてふ所のえとせ水を證れ
義あり通云あり

相傳往古 雄略天皇の御宇 日本紀雄略記三十二年戊午七月とあり 丹後國與謝郡菅川

の人小水江浦島子といふあり 寺記云相州三浦住人水江浦島太夫といふの
大裡の役も能くあそし丹波國餘佐郡菅川と

或ハ太師をせり續浦島子傳は浦島子何きの人ありと云ふ蓋上古の仙傳
或ハ太師をせり續浦島子傳は浦島子何きの人ありと云ふ蓋上古の仙傳

風土記ハ日下部百等々祖中々小節川の島子と云ふ是乃水江浦島子云云

一時七月の事なる小獨小舟に乗し海上小釣し靈龜を得り

其形勢と見小尋常はありと云ふこれハ恠と云ひ且何舊て是と

放ゆり川決辰ありと彼龜化し一人の美女とあり前の恩と

報んとく島子くもと携へて蓬萊山海若神の都に至るぬ

かく後浦島子ハ仙室の筵に侍り常に靈藥の味ひ成嘗

目小花麗を視目小雅樂の樂を聞觀宴日を送る 日本後記ハ
浦島子蓬

心起し獨二親を意た小神女小此を告ぐれハ神女ハ島子

別を意慕をとも竟小止るき色も見え縁ハかひなく

一箇の玉匣と與へく云く子遂小賤妾と遺れをく再ハ

此神仙境へ来らんとありハ必此匣の裏を開きんるありと

島子そを約しとり事外喜ハ彼匣を受傳へるを

分ち辞し去る頃蓬嶺の仙都とゆるくと云ハつら與謝の

舊里小飯も着ぬ 日本後記云浦島子天長二年郷小歸る今小至り三百四十
七年ありと云詞林采葉抄云島子蓬萊入の遂帝王

三十二代を送る水鏡ハ雄略天皇廿三年と七月ハ浦島子蓬萊へ傳るに

たり云同書淳和天皇天長二年と云浦島子ハ之と云雄略天皇の御世ハ

乙巳はありと又雄略天皇廿三年己未ありと云因考く小天長二年ハ支干

八年なりとされと物換り星移り家園ハ衰し河濱とあり山

岳ハ改り江海とある荒蕪の間邑煙を絶え舊塘寂寞とて

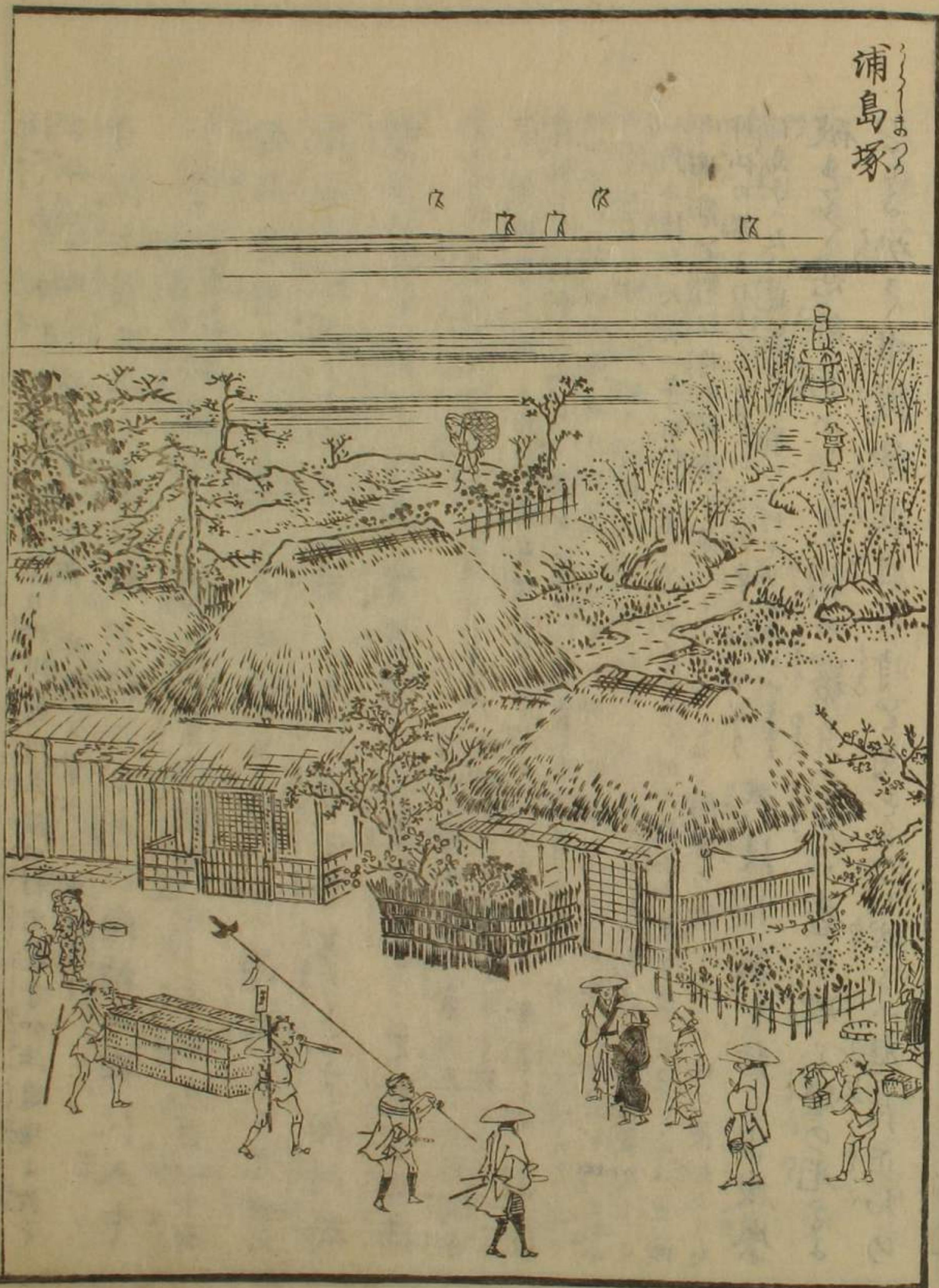
道路跡ハゆりゆりありと云人さへなると云れハかハ恠しみ

かの驚き郷人小旧俗の行方と問一人の翁答へく云く昔聞

の驚き郷人小旧俗の行方と問一人の翁答へく云く昔聞

の驚き郷人小旧俗の行方と問一人の翁答へく云く昔聞

浦島塚

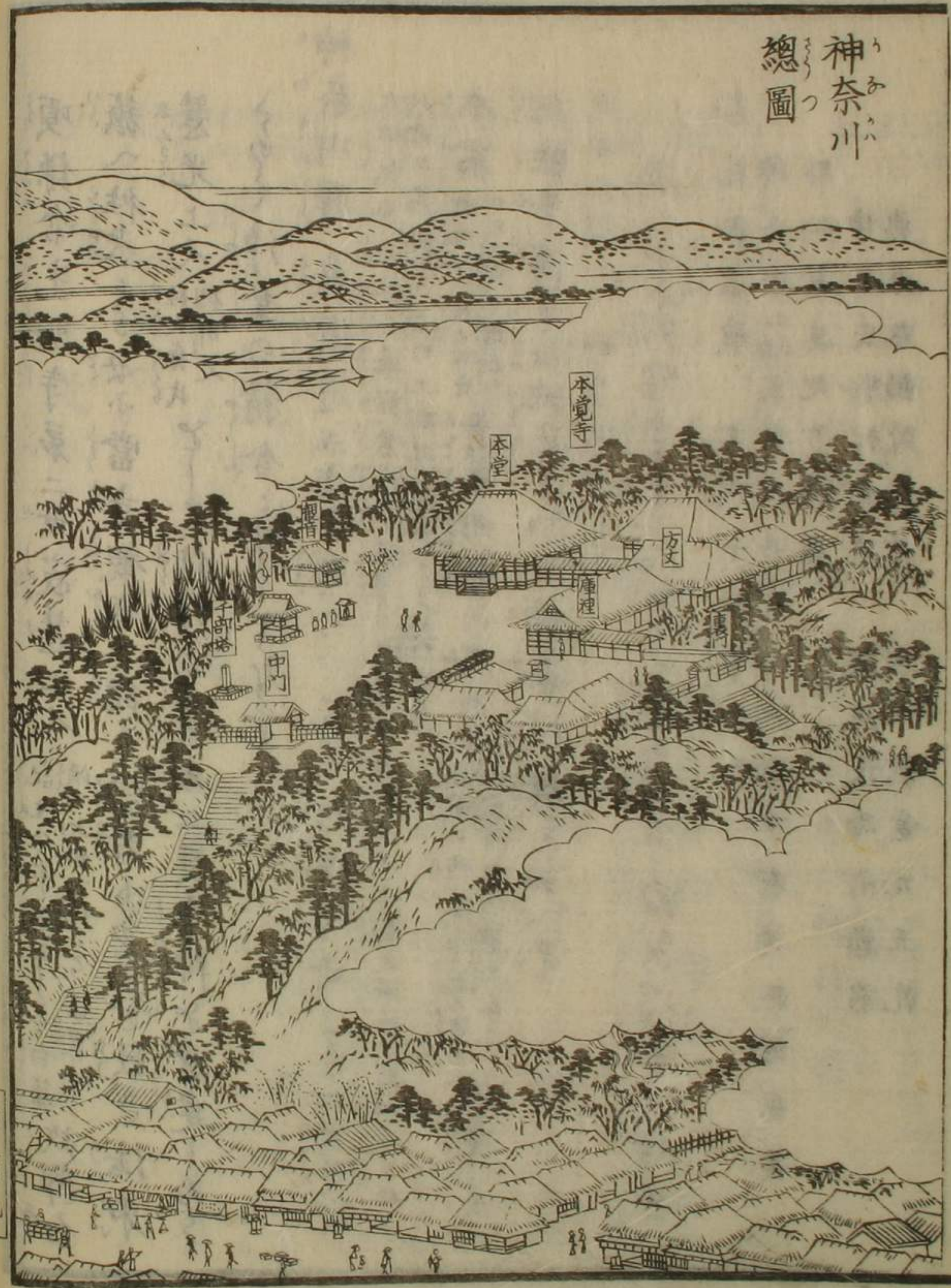


水江の浦島子といふもの釣と好舟小乗一々海遊ひ永く
 家小婦のそとつゝのちとて幾數百歳を経るゝをあるもや
 續浦島子傳よりうふ衣と洗ふの老嫗ふあめく旧里の古人と問姫吞へ
 歳と経るの傳來語云く昔水江浦島子といふ者あり釣を好舟小乗一々
 浦島子傳よりうふ衣と洗ふの老嫗ふあめく旧里の古人と問姫吞へ
 後記云く浦島子仙化あふ於る蓬嶺の仙宮遊入の間時世
 遙小隔る舊里の遷変せしむを悲歎一又仙遊の未央を想
 像く悲意堪も前の誓ひを忘れく忽小玉匣を開とられ
 裡より紫雲出く蓬城とくく變驟とくく去るの時
 其形容忽然とくく衰老皓白の人と変と云云
 絶而後蘇氣倍
 浦島子傳よりうふ衣と洗ふの老嫗ふあめく旧里の古人と問姫吞へ
 歳と経るの傳來語云く昔水江浦島子といふ者あり釣を好舟小乗一々
 浦島子傳よりうふ衣と洗ふの老嫗ふあめく旧里の古人と問姫吞へ
 後記云く浦島子仙化あふ於る蓬嶺の仙宮遊入の間時世
 遙小隔る舊里の遷変せしむを悲歎一又仙遊の未央を想
 像く悲意堪も前の誓ひを忘れく忽小玉匣を開とられ
 裡より紫雲出く蓬城とくく變驟とくく去るの時
 其形容忽然とくく衰老皓白の人と変と云云
 絶而後蘇氣倍



平尾

神奈川
總圖



本覚寺

本堂

六百九

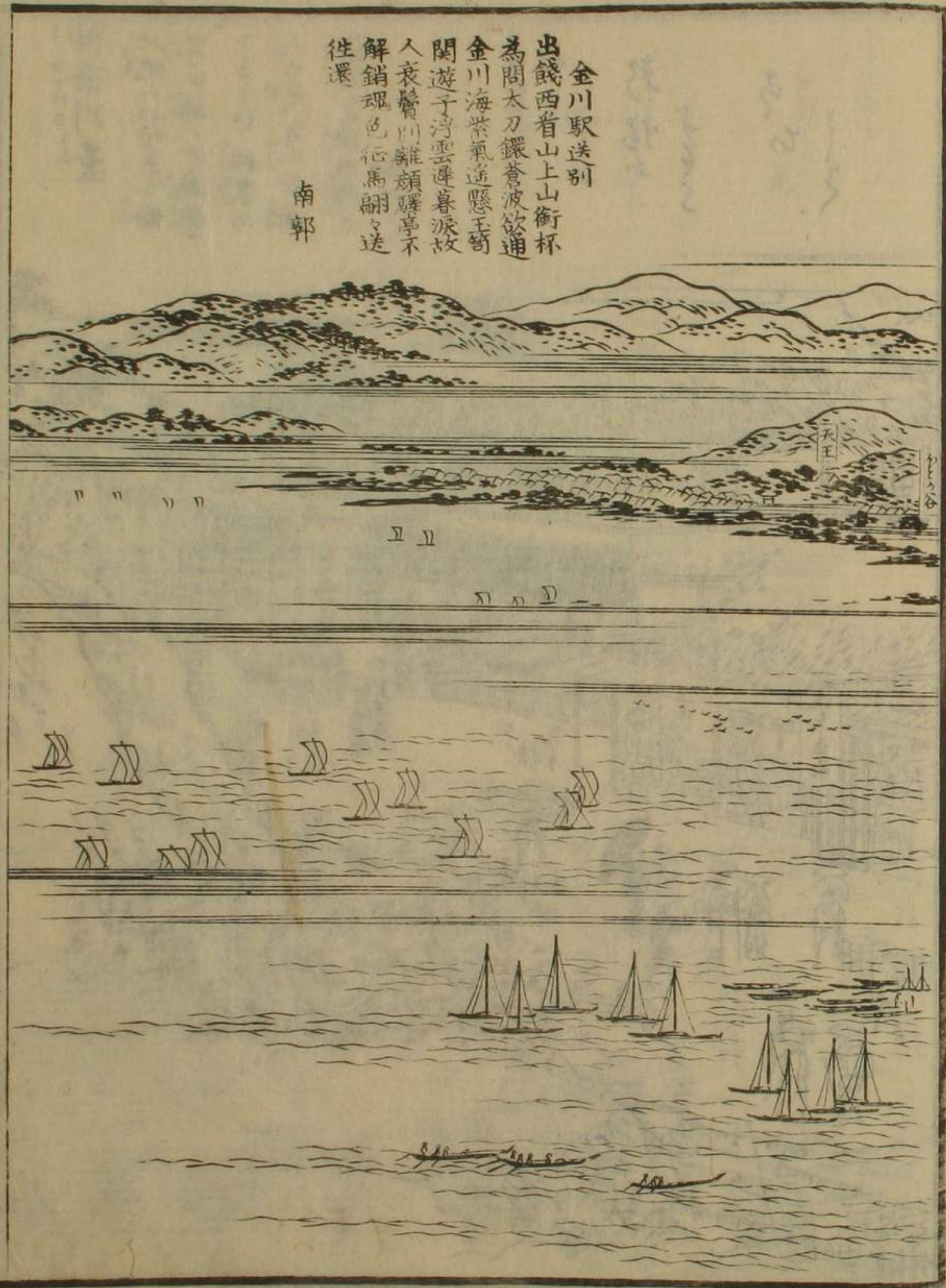


其二



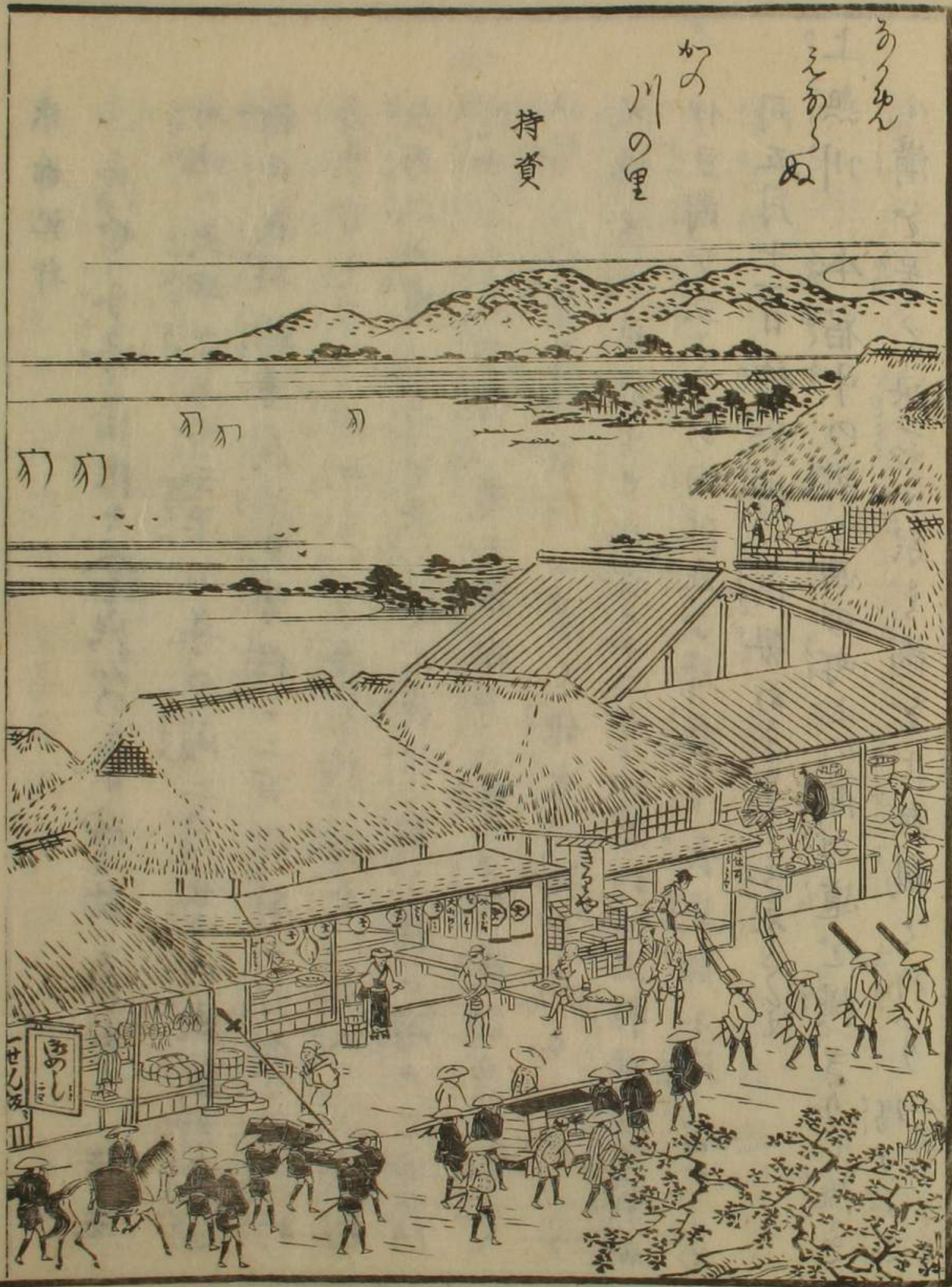
金川 駒送別
 出錢西省山上山街杯
 為問太刀鏢蒼波欲通
 金川海紫氣逆懸王奇
 関遊子浮雲遲暮淚故
 人衰鬢川離顏驛亭不
 解銷魂色征馬翻送
 往還

南郭



其三





持資

川の里

あつち
えあつち



神奈川臺
此地のりまは海
岸に臨みて海亭
をまわけ往来の
人の足を止む此
海辺を袖の浦と
名づく

平安記行

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

此の世をふるふ海流を人をもつるふ小舟を舟と云ふ

澤庵

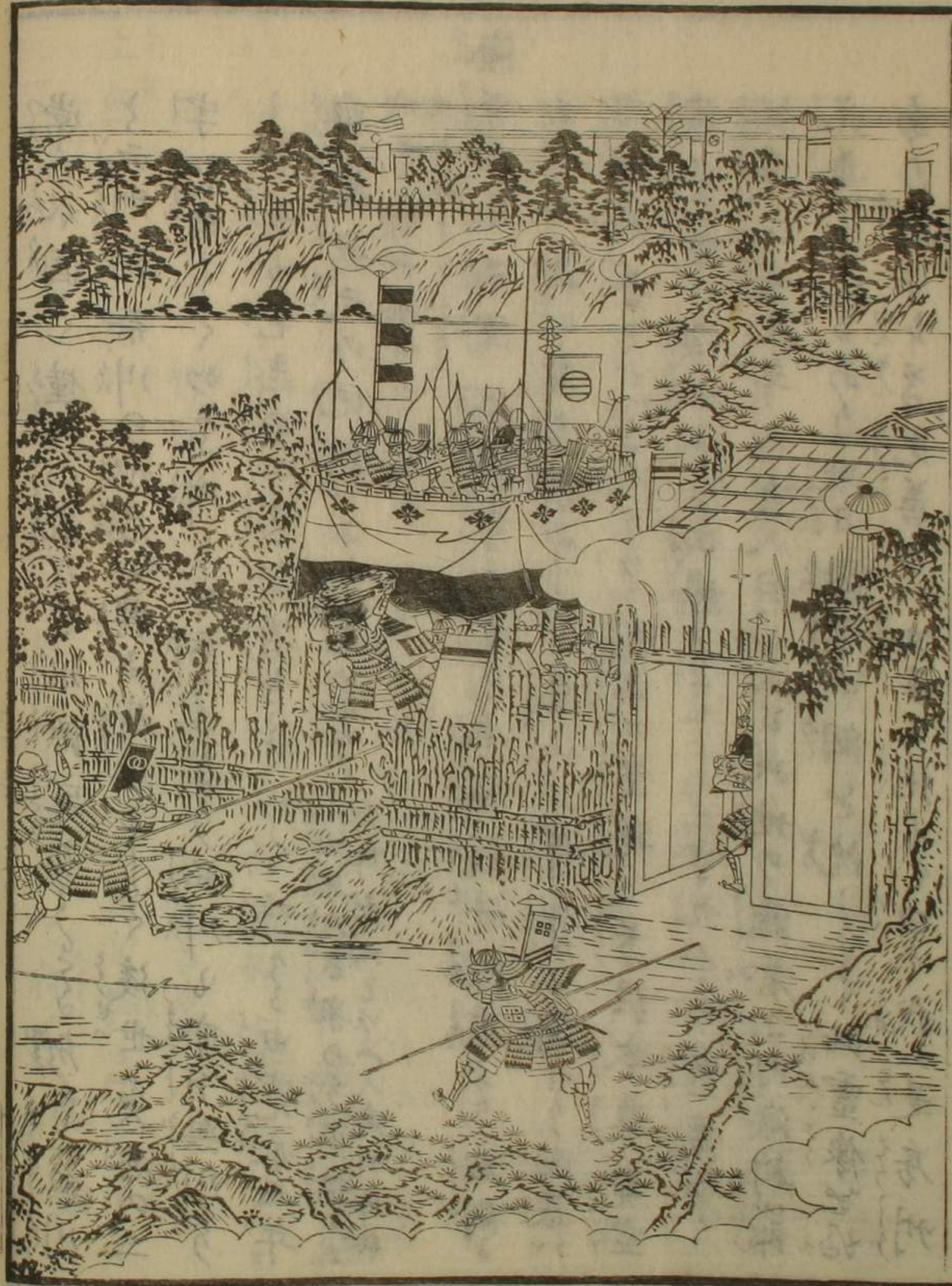
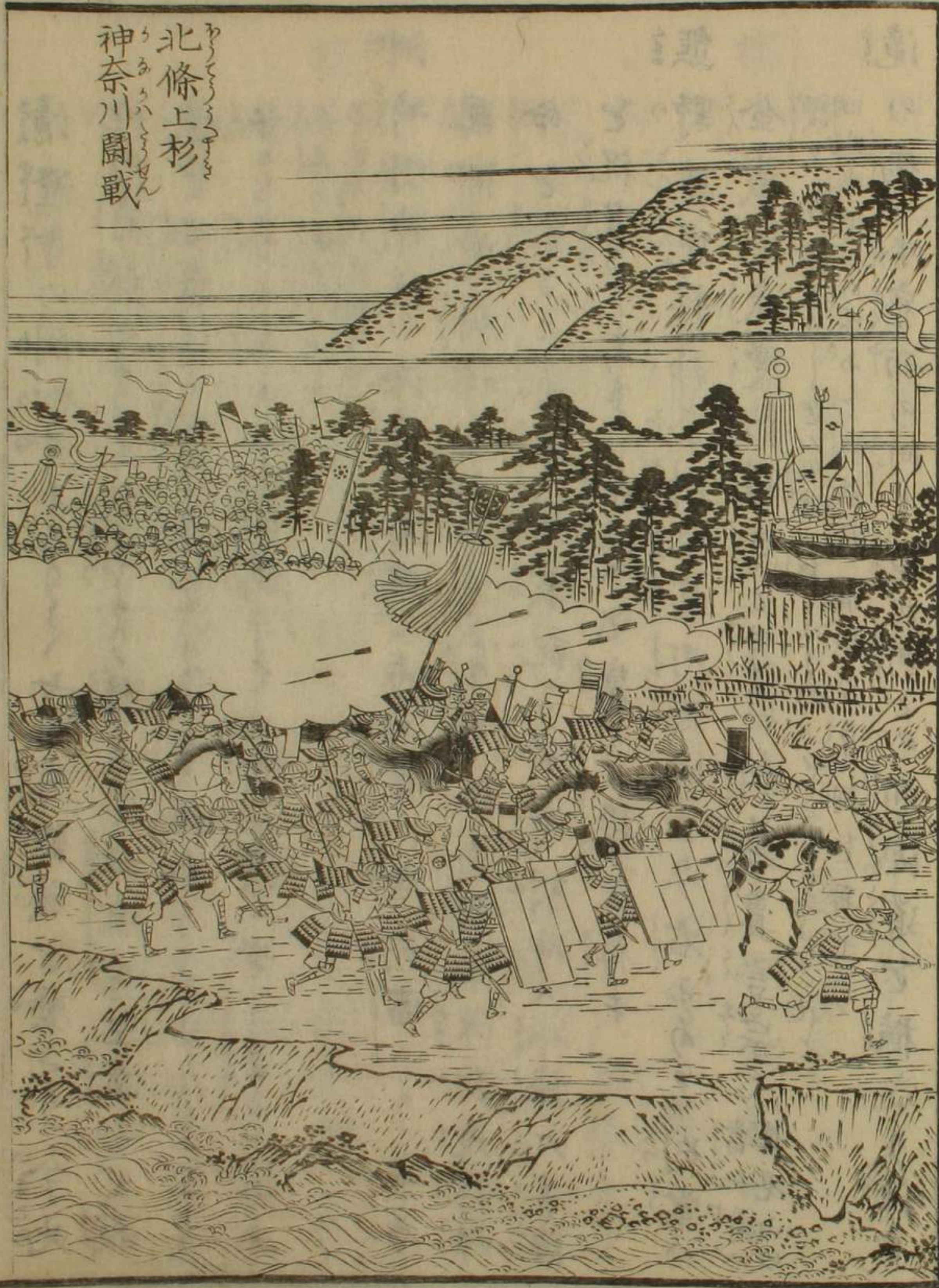
此地ハ大平記ゆへ正平七年の閏二月廿日の武蔵野合戦ハ
 新田義興殿屋義治兄弟終ニ二百餘騎ヲ打倒され落行
 るべき方もな一村死せしき命あれハ鎌倉へ打入るは足利
 左馬及小達と命を失ひやと夜半過る程ハ開戸を過るハ
 途中ゆへ石堂入道三浦助等の勢ハ行違ひあひ馳る
 此勢と打連て神奈河ハ著て鎌倉の様を問ふ由ゆ
 又鎌倉大草紙ゆへ永享十二年四月六日上杉修理亮持朝
 伊豆國を立る山の内比庄ハ帰恭一長尾郷ハ滞留せしめ
 同五月十一日神奈川へ出勢ありしゆへ
 上無川 本宿中の町と西の町との間の道を横きりて流る
 小溝を号く此ふ架も橋を上無橋と稱す 橋の長さ
 二間ハ云ふ

三ノ百十三

常ハ水涸く僅の小流なり水源定ならず其上無川
 と云則神奈川の地名の興る所以ゆへ後世災志の二
 字を略しし如奈川と云るなり品川も亦下無川あり
 是も毛志の二字を省きしゆへ呼る由寛永五年
 齊藤徳元の紀ゆへあり
小田原北条家の分限帳
 矢野彦六といふ人武州神奈

海運山能満院満願寺と号す本宿荒井町道より右側ハ
 あり古義の真言宗ゆへ鳥山三會寺ハ属せり開基ハ
 内海光善といふ人なり開山ハ重運と号す本尊虚空
 蔵菩薩ハ海中より出現ありし三寸九分の靈像あり
 相傳正安元年己亥八月十三日此地の漁者ハ内海新四郎
 光善といふあり此日海中ハ網を沈しし此靈像と見
 あり然るに光善の女子ト云く我ハ是房州

北條上杉
神奈川關戰



清澄寺の淵伽井ありて七百有餘歳を歴り今此地の有縁ありて彼あり移るは汝堂宇を營む我像を安置せよ必子孫を〜幸福あり〜めんとなり依り直に當寺を開創して此靈像を安〜するなり光善の遠孫此地ありて今移連綿なり

洲

洲崎明神祠 海道の右側ありて普門寺別當より安房國洲崎明神は同〜房徳志料小天比理乃咩命を祭ると源平盛衰記は洲崎明神ハ八幡大菩薩と祝するともハ兩説を擧ぐ疑と存也

熊

野権現社 神奈川本宿町海道より右ありて別當ハ金藏院東曼陀羅寺と号し新義真言宗之當社借ハ頂勸請ありて此地へ移りて今其地を再せん滝の橋 本宿西の町と滝の町との間海道を横きり流る

川は架き此橋下の流をと滝の川と号く故あり水源七八町西の方堰村と云より祭する所の流あり

橋

橋本宗興寺橋より向ふの川添平町より西の方道より左ありて曹洞の禪宗より同所本覺寺は屬せり

本釋迦本釋迦ハ室朝の作ありて一尺をり此座像あり

大将軍家御上洛の時此地本宿小湊旅館を儲せられ

一頃沙茶の水小掬せられと云

觀

音山 山頂小觀音堂あり故は山の号とせり宗興寺より令せり石燈石燈尊立して寺は總門の正中に對し本尊正觀音の像ハ毘首羯摩天の作なり五寸九分あり昔焼亡ありてその旧記と失ひぬ今其来由とありととのり

洲崎明神



観音山

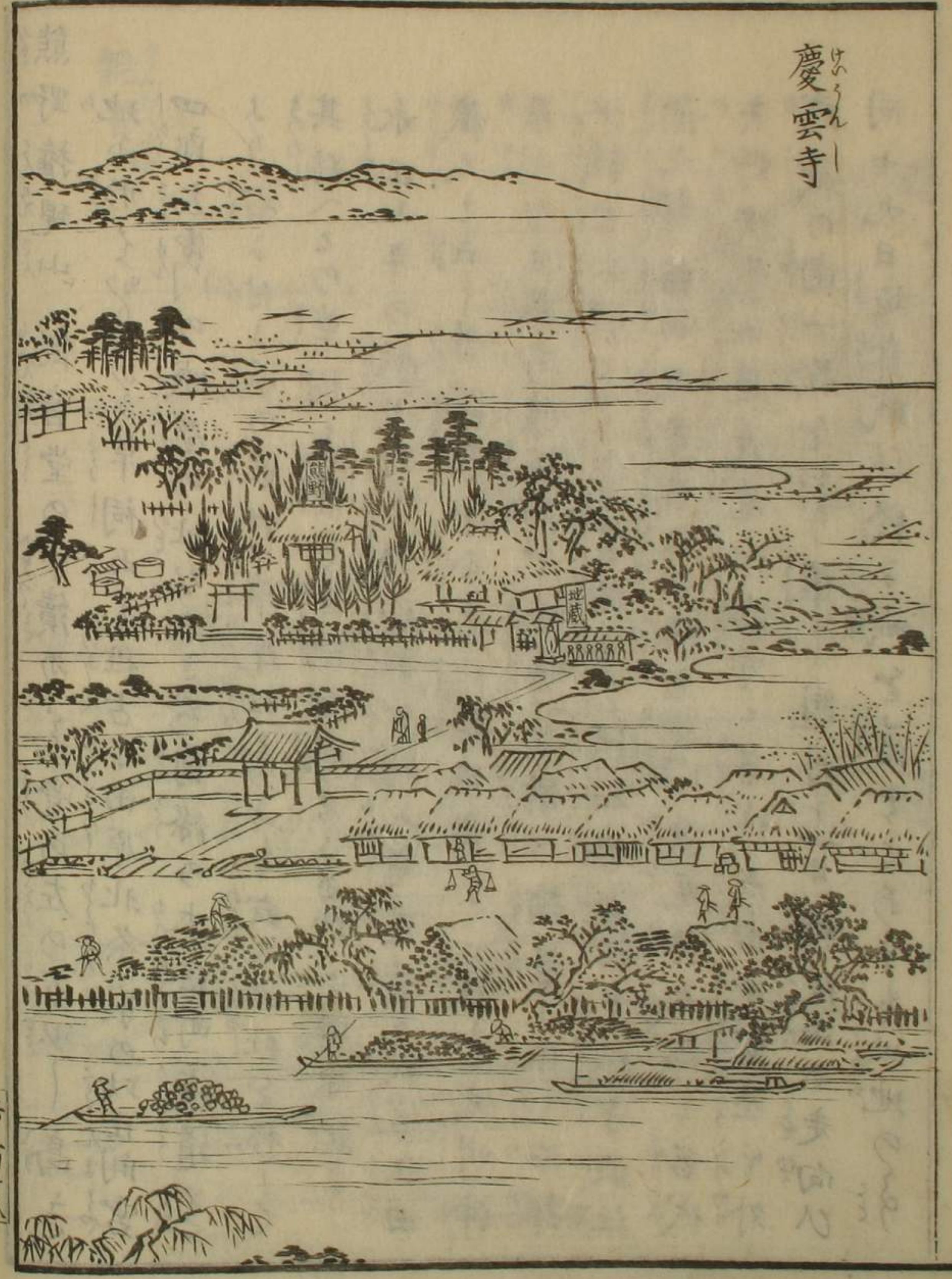


熊野推現山

熊野推現山 観音堂の山續ありて堂の左の方より高き
 地小形なりあり草祠ありて往古小田原北条家の功臣間宮
 四郎左衛門の城壘の址なりと云前條の本宿町海道迄
 より右より付る所の熊野推現社ありて或は此社を移して
 其跡へこの草祠を置く旧地を存せしめや小田原記より
 永正七年の秋七月上杉治部少輔入道建芳被官上田
 蔵人と云一者謀叛を企て北條早雲より一味一武州神
 奈川なる熊野推現山を城廓に構へ楯籠り依りて治部
 少輔自大将とて管領より加勢成田下総守洪江
 孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎名代
 矢野安藝入道長尾但馬守名代成田中務丞外
 武蔵の南一揆をかり催し同月十一日権現山を走向ひ
 同十九日返責戦ひ終り城を落せしめ此地のあり



慶雲寺
けいうん



小田原記云此山ハ四方峻岨中々岸高く峙ち南ハ海北ハ深田なり
西ハ山嶺より一とを削くと堀切て山嶺積る平覺寺の地藏堂と
根城ヲ取

吉祥山慶運寺茅草院と号滝の橋の北詰より西の方へ一町半

をうり入る飯田道の右側にあは浄土宗花洛知恩院も属せ

本寺阿弥陀如来ハ立像三尺計あり作者関山ハ音譽聖觀

上人ゆゑ文安四年丁卯開基との浄土傳燈系圖小定蓮社音譽

上江州甲賀源氏と初樹場の法源寺弟二世となり又當寺を開創あり室徳

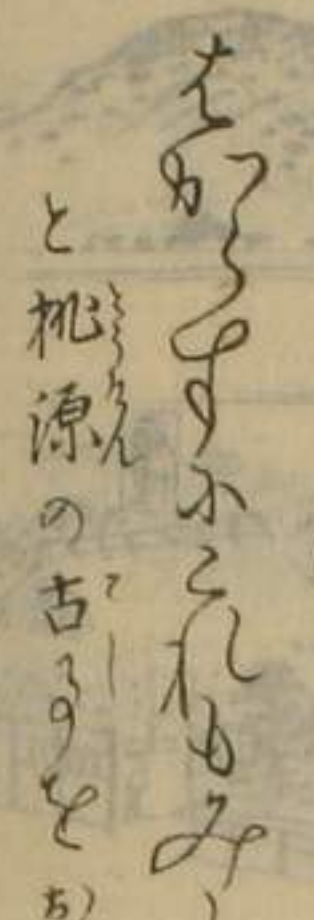
元年増上寺弟三世とあり文明年間一日火車と示現し空中に衆去り

辭世の頃及び和奇あり世に傳へ觀音の應化なりとのをいへり又音譽

上人火車に乗せりハ親普開集あをつとひひりるなり

中興関山ハ願故上人と号

東國紀行 經てく津奈川ハはききとてひつちも本札の樹々ハ
云つけりも後名慶雲おふかたつとあり長老
のひひりるの宴をたかやちとあれハ
と松源の古うとひひりるをたかやちとあり下畧



宗牧

披此宗牧の紀乃慶雲ハ作後雲を運改つらん又宗牧乃

臥龍山雲松院 乾徳寺と号を滝の橋際より一里十四五町西の

方小机村長津田街道の左側あり曹洞派の禪林や

遠州の石雲院ハ属せり本寺虚空藏菩薩ハ木佛に

座像八寸計あり當寺ハ小机の城代笠原越前守信為開創

の寺院也當寺靈牌ハ乾徳院殿雲松道慶庵主開山ハ季雲永岳

大和尚と号 大永六年丙戌二月 總門の額臥龍山の三大字を僧

月舟のあゆり小田原記ハ弘治三年丁巳七月二十六日武州小机の城代

号ハ武勇技藝とあり其子ハ能登守なり古早雲寺殿の忠臣ハ長徳ハ付氏綱

氏康ハ忠功ハ其子ハ能登守なり古早雲寺殿の忠臣ハ長徳ハ付氏綱

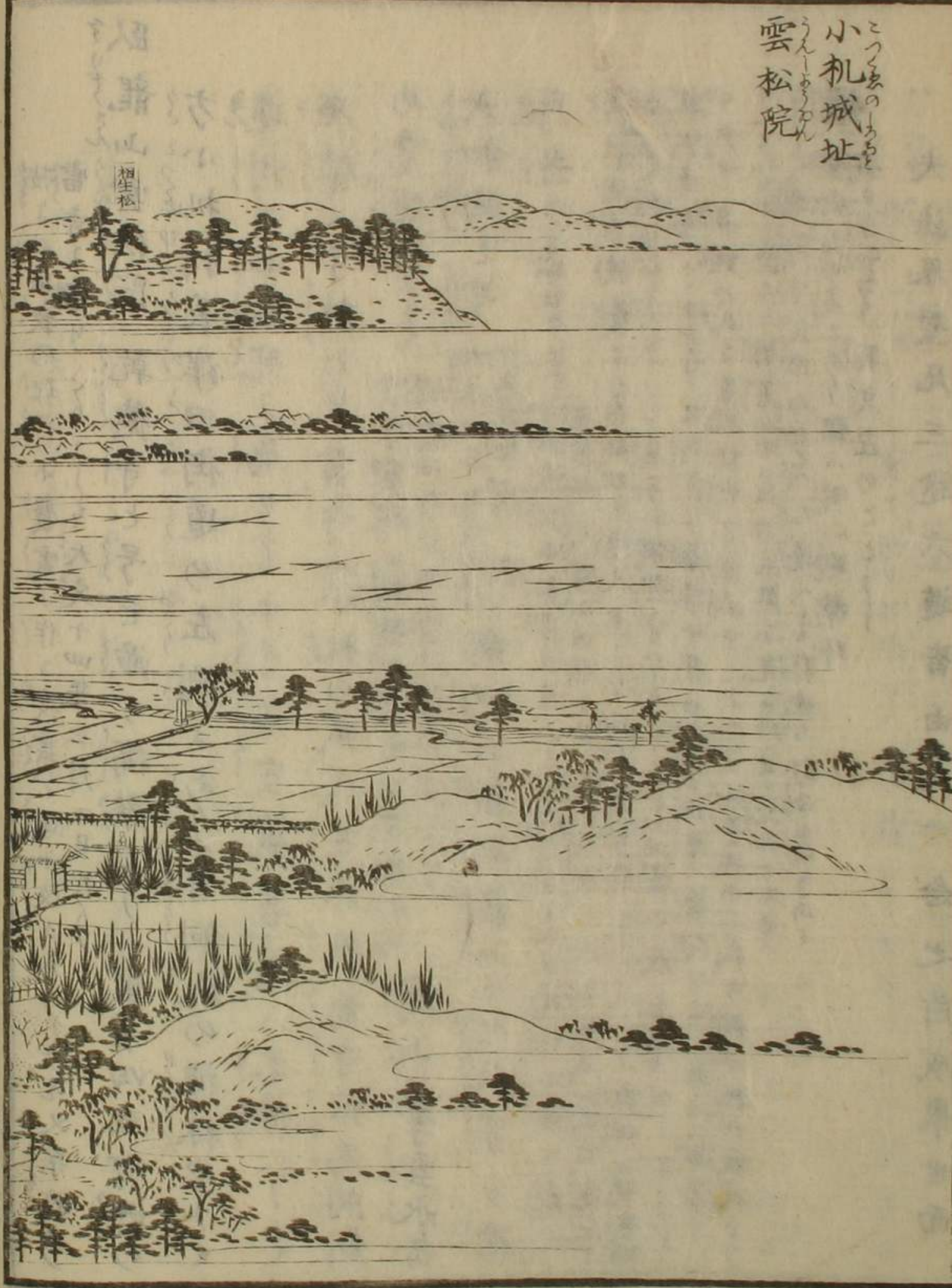
雲松道慶ハ其子ハ能登守なり古早雲寺殿の忠臣ハ長徳ハ付氏綱

小机ハ長綱の代ハ笠原能登守在城せり其子ハ能登守なり古早雲寺殿の忠臣ハ長徳ハ付氏綱

中越前守没卒の年代元建永徳三年先づ九六三年

鐘堂前左の方あり銘ハ明心越前師

夫法界聖凡三途六道皆由人一一念之所成舉世而



言則有陰陽晝夜之分在人而言之有迷語聖凡
 之別蓋以我佛垂慈教六有無情同圓覺性故又以
 利生為事然而佛種々隨機導利曷勝言哉茲有
 設鐘聲佛諦技濟淪稱其功德曷勝言哉茲有
 武州都蒸郡小札庄根古屋臥竜山雲松院住持
 別峰者曹洞之末孫大源派遠州高尾石雲院之
 門葉也於是歲壬戌暮春積衆緣開鑄銅斯鐘以就
 并新建立樓門而施鐘於其衆因質余銘而記之
 銘曰幽世皆暗惟幽處皆明聲傳法界警徹幽冥
 舉處聞鐘幽處皆明不聞而聞幽處無盡含識俱登化城
 幽而返聞行願速生成無盡含識俱登化城
 恩遍六道利極四生無盡含識俱登化城

東臯心越杜多稿

于昔天和龍集玄默闍茂季春如意珠日
 臥竜山雲松禪院現住宗龍代置之
 武藏國豐島郡江戶住家御鑄物師國永作

小札城跡同一通道五丁計を隔て道より右の方城坂と云を

二町分登くある土人の城山と号せり今官林と云小田原記小

天永四年甲申正月十三日北条氏綱上杉朝興と攻落し

歸陣の後小札の城を普請ありと記せり依老臣笠原

越前守同能登守父子を城代と云此所小居住せ

むとなり封境今南北一町余東西四町計の小阜に

回る小違の形を存せり高六七中心の平地幾り百歩

をくあり今島と云古橋樹郡都萊郡小

家の臣沼上出羽と云人の子孫今此地に存を其家

刀劍の類と云むると云内中田の地と領を

其くを云あり又同境小笠原藤左衛門と云

佐渡と云左衛門佐和の領小札御島其論と云

高田玄蕃崎山根常生の内と領一笠原平左衛門と云

即岡の地名と注しかへてと撰ゆり越前守の氏族なりと云

白山権現城山の東北山背あり古の鎮守ありと云

其くを云あり又同境小笠原藤左衛門と云

佐渡と云左衛門佐和の領小札御島其論と云

高田玄蕃崎山根常生の内と領一笠原平左衛門と云

即岡の地名と注しかへてと撰ゆり越前守の氏族なりと云

松龜山泉谷寺 本覚院と号し城山と云ふ五六町と隔て長津

田通道の左ありて大門三丁計の間に左右に櫻の列樹あり

此地の古名と泉谷と浄土宗の寺なり花洛智恩院に属せり本

尊ハ一光三尊の阿彌陀如来本像あり二尺八寸計あり

作者あはくは當寺ハ鈴木但馬守と云ふ人の開創あり

此の山を名蓮社見譽大道善悦大和尚と号す弘治元年

化寂を下總殿沼中門の前小天正十八年小田原北条家より建

弘治寺の六世なり

淡島神社 相模街道大熊村を左へ十三四町入る折本村小

ありて神主雲路氏奉祀を祭禮ハ二月三日縁日ハ毎月三日

十三日や々々祭神ハ少彦名命及び神功皇后二座なり勸

請の初ハ詳ありと云

櫻樹 神前東の方あり昔土人此山に入櫻の老樹と新とせんとし

代り田と徑くは此よりと云ふと云ふ至りては櫻の老樹の傍に

大なる蛇あり其樹を削りて印を惜む人似たりと云ふ

其根を採りては宝水の徳ありては山にけりては

其根を採りては宝水の徳ありては山にけりては

淡島神社之碑

寛保十戌夏折本の邑長藤原英至と云ふ人邑民と共に謀り當社を新

せんといふに其地此の松下某公の采邑ありては英至此の

祠に遊き地敷百歩と此の神祠に屬し英至退く文を麻布善福寺の

請ひ書を鳥石山人より求む額ハ本多康桓竜の画ハ古山平國豊の

與文ハく首きく云ふ

多目周防守宅地 青木町の中ありとおぼしめされ其地定あり

小田原記信玄小田原と襲つたる条下は多目周防守その項

青木と云ふ居住しりといふ

程ヶ谷時田城の条下は洋より開

東古戦録に信州上州の境西

北条家の領地なり

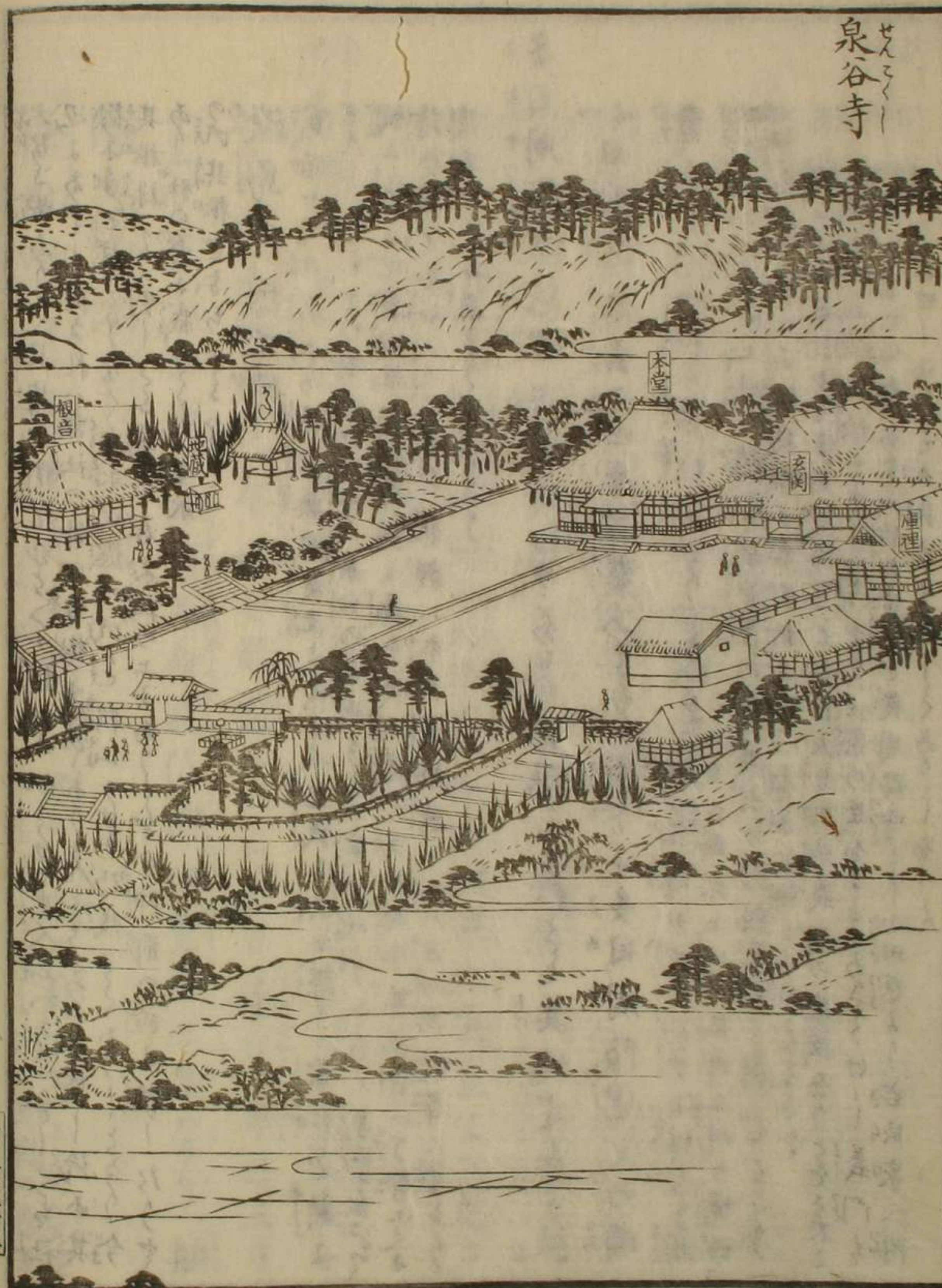
北条家の領地なり

北条家の領地なり

北条家の領地なり



泉谷寺
いづみや





師岡
熊野権現宮





青木山あきぎさん西向寺さいかうじ同所どうじよ青木町あきぎまちの横小路よここうぢの右側みぎがはあり虚無僧寺こむそうじに

本覚寺ほんかくじ切通きりどほり同所どうじよ本覚寺ほんかくじの北きたの方かたの間まを切開きりひらきく道路だうぢとを

張津田ちぢんだ通道とうだう及および三澤みやざわ永正七年えいせいしちねんの秋あき上杉治部かみすぎのぢぶ少輔せうほ入道にゅうだう建芳けんほうう

被官ひくわん上田かみうだ蔵人くらにん建芳けんほうは背そむき此地このちを打うく出熊野いでくまの権現山けんげんさんを

城廓じやうかく小取立ことりたて西にしは續つづきく山やまとハ其間そのまをハ堀切ほりきり本覚寺ほんかくじ

の地藏堂ぢざうだうを根城ねじやうとせしよし小田原記せうだわらぎよんえさきあり権現

青木山あきぎさん本覚禪寺ほんかくぜんじ同所どうじよの南七軒町なんしちけんまちあり曹洞そうどうの禪刹ぜんせきにして

小机ここまの雲松院うんそういんは属ぞくを本ほん多た地藏菩薩ぢざうぼさつハ一尺四五寸いちぢくごしゆの立像たつざう

なり相傳あひつたふ當寺たうじハ嘉祿二年かりよくにねんの開創かいさうなり其後そののち天文紀元てんもんきげん

の年曹洞大源そうどうだいげんの末流まつりゆう李雲りうん四傳しへんの法孫ほふそん陽廣やうくわう禪師ぜんじ此こゝに

住初すむしめく法幢ほふたうを建たて禪風ぜんふうを起おこす元祿の初殿堂門廡を佛殿の

額ひしよ本覚禪寺ほんかくぜんじと書かせしを圓明寺えんめいじの開祖かいそ道山だうさん和尚おやうの

筆ひしなりしと

圓明山えんめいさん陽光院やうかういん本覚寺ほんかくじの南みなみ隣となり遠州えんしゆ可睡齋かすいさい退院たいいんの地ちは

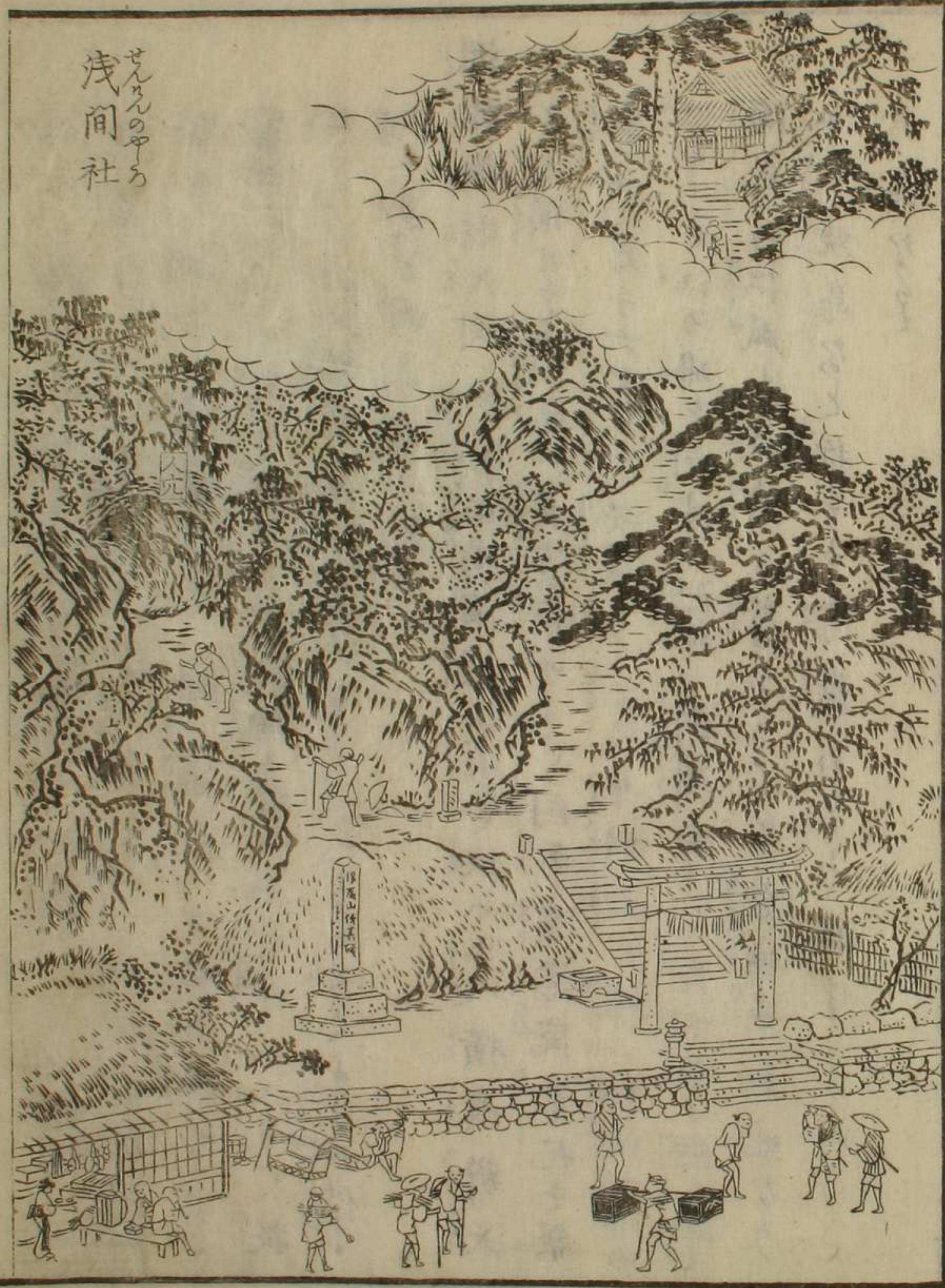
一町斗いちちゆうと南みなみあり別當べつたうハ真言宗まげんそう同所どうじよの萬年山まんねんさん普門寺ふもんじ奉祀ほうじを

祭礼さいらいハ五月十七日ごごにじちちちちなり飯綱いづな権現けんげん本地ほんぢ佛ぶつを不動明王ふどうめいおう行基ぎやうき

大士だいしの作つくり座像ざざう一尺七寸いちぢくしちすん垂跡すいせきハ大山おほやま祇命ぎにんといひお供おんぐなり

右大将みぎだいしやう頼朝らいぢやう卿けい此こゝの像ざうを深ふかく崇敬そんげいなりし治承四年ちじやうしやう

せんげんのやう
浅間社



富士浅間祠 同所の南芝生村海道の右の方山の中腹にあり

多ひきや神の河原とてかへそらふ松葉とまぬへといハ 光廣
按小葉集よ初五文字とあるまのちのちあつてあ結句のとつとやとあり黄葉集をわきまへてく侍写のちあつてあり

袖の浦 此地の光景長汀曲浦とあり袖の形は似たりふ小名
 とよ鳥丸大納言光廣卿關東下向の頃帰路小再此地
 よきりあひく和歌を詠せり
其時みづうらを深き詠草ハ此地
 江戸屋何基り家に秘免置り
 こゝに袖の浦と泊る
 八月伊豆國石橋山敗軍の後安房國へ渡海の時本宮の
 靈亦よりく風浪の難を逃れあひ其後竟小天下一統あり
 あひりハ文治年間此地に宮社造営ありく神領等と寄
 らもありしとて是道の後大田道灌此地よりくむる信厚
 かりと云 軒名ハ甚西

保土ヶ谷天徳寺とつる真言寺の持なり此地に一の
 暗窟あり上俗是を富士の人穴と号く相傳昔頼朝卿
 富士の裾野小御獵ありと頃仁田四郎忠常も余せり且
 富士の人穴の奥を究めしむ忠常後小此穴中に入りて技
 術ありとの誕譚ありとるなりとつるとも古くより云傳る
 故小是を闕みあつす
 洲 乾辨財天祠 芒新田横濱村あり故小土人横濱辨天
 と稱せし別當ハ真言宗中つる同所増徳院奉祀を祭
 礼ハ十一月十六日なり安置せし所の弁財天の像ハ弘法大師の
 作中江の嶋と同名此地ハ洲崎中つる左右共ハ海に臨ミ
 海岸の松風を波濤ハ響をうとせむ佳景此地なり
 海中姥島など稱する奇巖ありと眺望せしむ
 秀美なりと

